

人偉の土

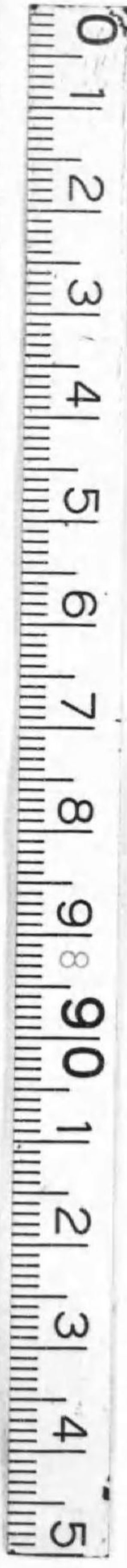
特218

644

×
複写



纂編會育教縣卓岐



始



77 218
644

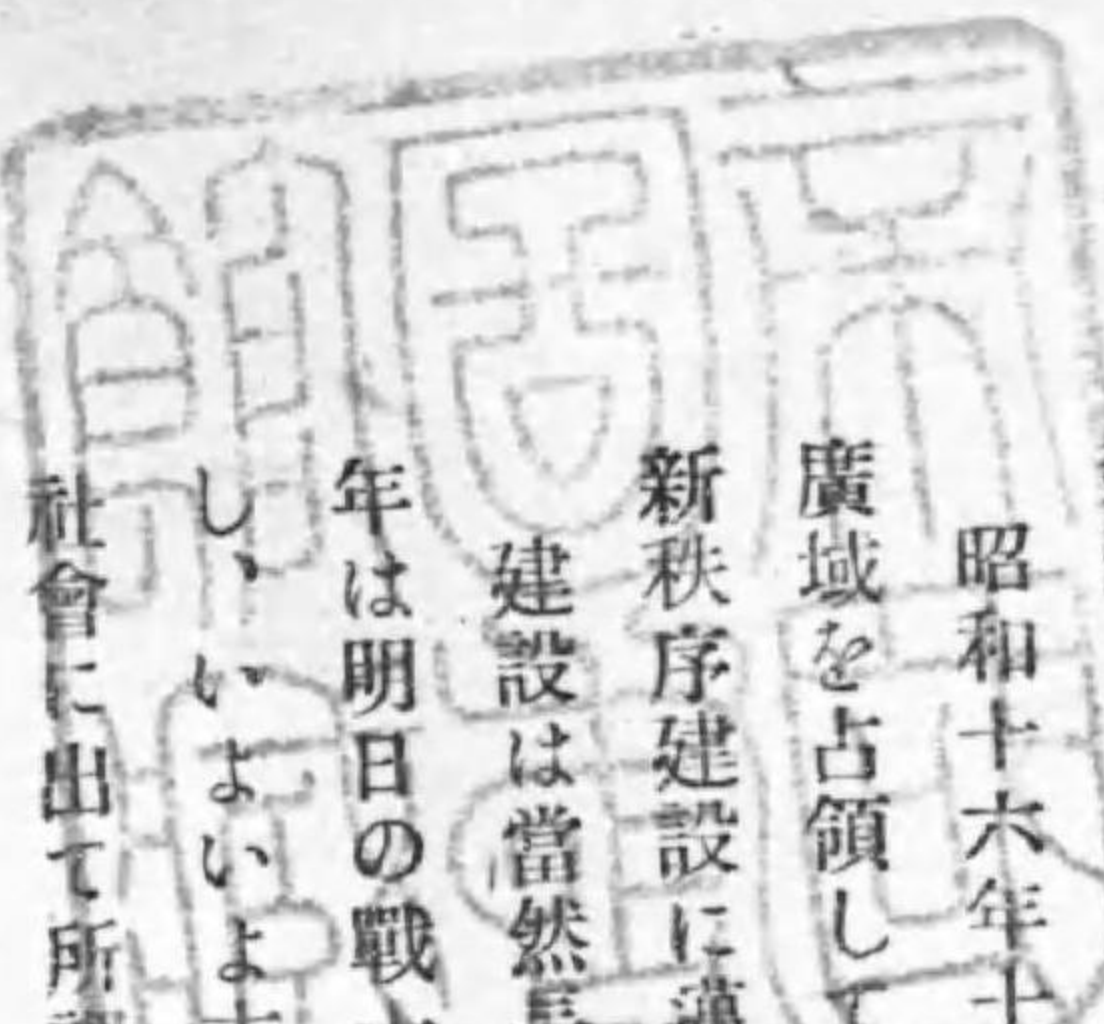
序

本會は曩に郷土勤皇家篇を公刊して、國民學校初等科上級生以上の青少年讀物とした。ここに郷土の偉人上巻を續刊して、特に文化風教に貢献した先覺又は殖産興業に盡瘁した功勞者の事歴を紹介することとした。

昭和十六年十二月八日宣戰の詔書を拜してよりこのかた、我が國は振古未曾有の大廣域を占領して、今や大東亞共榮圈の確立をめざし、その指導者となつて道義に基く

新秩序建設に邁進し、以て世界人類の恒久平和をうち立てんとしてゐる。青少

建設は當然長期戰である。戰鬪と共に思想戰生産戰にもうち勝たねばならぬ。青少年は明日の戦士である。前篇と合せて本篇を読み、先人の國家にいたせる功績に感奮し、いよいよ志氣を鼓舞し盡忠報國の決意を固め、家庭に於て又學校にあつて、はた社會に出て所謂職域奉公を實踐されることを期待して止まない。さすれば編者の欣快これに過ぐるものは無い。



本書はそれぞれ實地教育に當てられてゐる諸氏の執筆を煩はしたものである。茲に筆者に對して厚く感謝の意を表する次第である。

昭和十八年二月八日

岐阜縣教育會主事 阿部榮之助

目次

一	岡田寒泉	一
二	加藤歩齋	二六
三	江馬蘭齋	二五
四	林述齋	三六
五	佐藤一齋	四六
六	飯沼慾齋	五九
七	村瀬藤城	七四
八	坪井信道	九二
九	富田禮彦	一〇六
十	野村藤陰	一二三
十一	坪井伊助	一三三
十二	名和靖	一四二
附録	年表	一五二

郷土の偉人上

一岡田寒泉



岡田寒泉

岡田寒泉は又次郎後式部と改め
また清助と稱し、名は恕、字は中
卿、掛斐の旗本岡田將監の分家、
岡田善富(西丸書院番二百石)の二
男として江戸に生まれた。山崎派
の學者村士玉水につき朱子學を
修め、後松平定信が幕府の政治を
改革した時、召されて昌平校の儒
官となつた。時の人から「寛政三
博士」の一人と尊び重んぜられた。
寛政六年には常陸國七郡百八十

二村の幕領代官職となり五萬石の邑を治め、翌年からは、そのかたはら又昌平校に出て講義も行った。代官所の村々には「岡田大明神」祠、功德碑が建てられ追尊されて居る。

文化十三年八月九日歿した。墓は東京小石川の先儒墓にある。大正五年特旨を以て従四位を追贈せられた。

(一)

寶暦元年もまさに暮れようとする冬の日の午後、江戸冷水橋の岡田の邸はひっそりとしてゐる。庭のさざんくわに集つた雀の影が、明かるい障子に時折動く。南をうけた暖い部屋の中では、見るからに賢さうな十一、二の少年が、さつきから机をへだて、母と對座してゐる。

「岡田の家柄を知つてゐますか。」

といふのは母の登勢子。膝に手を置いてじつと聞き入るのは、千二百石の旗本岡田善富の次男清助である。人々はこの家の事を清水岡田と呼んだ。本領が美濃國大野郡今揖斐郡清水村にあつたからである。

「御本家は旗本の中でも、特別由緒のある家柄なのです。」
母の語る本家といふのは、今の揖斐郡揖斐に陣屋をもつ五千三百石の旗本岡田將監のことである。

「岡田家は清和天皇様の御曾孫源滿政さまの血すぢなのです。代々尾張國山田の庄岡田原に住んで武勇の譽が高く、殊に重忠さま父子は承久の昔、勅をお受け奉つて北條義時の軍を墨俣や抗瀬川でお防ぎになりましたが、戦ひ利あらず、重忠さまは嵯峨宮といふ所で勇ましく戦死をとげられ、重繼さまは流れ矢に當り、身の自由を失つて捕へられ、お痛はしや、京都で賊の及にお果てになりました。」

重繼さまから三代目の重綱さまは、建武の昔、祖先の志をおつぎになり、新田義貞公に従つて賊將高師直と箱根に戦ひ、立派な手柄をお立てになりました。又、尊氏が京都に攻上つた時は、後醍醐天皇さまの叡山行幸にお供上げました。かうして一途に忠義をお勵みになりましたが、延元元年土岐頼康と尾張に戦ひ、つひに戦死をとげられたのであります。」

祖先歴代の盡忠、その血潮が今自分の五体に流れてゐると聞かされた清助は、今更ながら新たな感激に胸をふるはせるのであつた。

「遠い昔のお話は、又お父さまにお伺ひすることとして、今度は近いお話を聞かせませう。」

と、母の話はなほつゞく。

「岡田家初代の善同さまのお父さまは、戦國の頃織田家に仕へ、尾張の國星ヶ城十八萬石の城主であらせられました。善同はその二男としてお生れになつたのですが、太閤さまに仕へてその武勇と才氣をうたはれました。關ヶ原戦争後東照宮さまに屬し英才を認められて美濃の代官となられたのです。初めは可兒郡の姫の郷においででしたが、後大野郡におかはりになり、揖斐の陣屋にお移りになりました。」

母は、善同善政二代の武勇談をこまごま話した後、

「善同さま父子共に善い政治をおとりになり、民に對しては、きびしい中にもやさしい心をお用ひになりました。政治をとる者はこの心掛けが大切です。美濃國は大きな川が流れて、昔から水害の多い土地であるため、お二人とも治水や土木方面には殊に

お力を注がれ、領民からは井水明神と仰がれました。今でも國へ歸れば、岡田の尻無堤や猿尾堤が残つてゐます。」

母は最後に言葉を改めて、

「今も話したやうに岡田の家は、まことに由緒ある家柄なのです。そなたは來年はもう十二、文武の道にいそしんで、五つ星の家紋にかゞやく岡田の家名を一段とあげますやう、この母は祈りますぞ。」

みつめる母、見かへす子、たがひの瞳の中には熱く燃えるものがあつた。

かうして、清助は時あるごとに母から尊い訓を受けるのであつた。

(二)

青年清助の血みどろな修養の日はつゞいた。朝は星をいたゞいて道場に通ひ、夜は家人が寝しづまつても書物から眼を離さなかつた。家人も家臣も、その余りにもはげしい勉強ぶりに、その身を心配した。

しかし、清助の張り切つた精神力は火と燃え上つた。槍は小南一郎兵衛、馬術は長

田某、弓は天野一芳院、劍は淺井周山、兵學は村士淡齋と、當時名高い先生について火の出るやうなけいこを積んだのである。

人の熱心ほど大切なものはない。彼の學問も武技も日一日にぐんぐん進んで、何れも奥傳を授けられ、江戸の町道場にその名をうたはれた。將軍の前で武技を演じ、いたく賞せられたのもこの頃のことであつた。

青年劍士として清助の名が道場の話題となつた頃、また學者として寒泉の名が重きをなし來た。

彼は武術修業のかたはら、一寸の暇も惜しんで漢學を内山賀邸、詩文を井上金鷲、朱子學を淡齋の子玉水に學んだ。清助の不眠不休の努力はつひに實を結んで、知る人も知らぬ人も「冷水先生」「冷水先生」といつてその名を慕ふやうになつた。「冷水」といふのは清助の邸が冷水橋の近くにあつたからで、彼は「冷水」に因んでその號を寒泉となへるやうになつた。

天明年間大飢饉がつゞいて惡病が流行した。江戸の町は殊に甚しかつた。

「何とかしてあはれな人々を助けたいものだ。」

寒泉は心からさう思つた。しかし、まだ親に養はれてゐる身分の彼には、何としても手の下しやうがなかつた。

「吾に食をほごす力はないが、せめて醫療法を市民に授けて死だけは救つてやらう。」幸ひ、彼には醫療の心得があつた。寒泉は毎日そつと邸を抜け出して町々を廻り、病人をみると共に病氣のなほし方を記した印刷物を配つて歩いた。

天明七年松平安信は、その頃のゆるんだ政治を立直すため、幕府にはいつた。彼は悪い政治を改める第一歩は教育を振興することにあると思つて、林大學頭をたすけるりつばな學者をさがした。

ある日、黒澤雉岡に向つて、

「幕府にはたくさんの旗本がある。それらの子弟の中に入りつばな學者はないものか。できることなら旗本の中から選びたいものだが。」とかねてからの意中を物語つた。

「旗本にもりつばな學者はたくさんあります。然し岡田寒泉の右に出づるものはありませんまい。」

彼こそ最適任者と存じますから是非お用ひなさい。」

雉岡は即座にかう答へた。

「ぢやしばらく雇として用ひて見よう。」

定信はまだ寒泉を知らなかつた。だから先づ雇として彼の人物を試さうと思つたのである。

「寒泉は試して見る必要がありません。いづぞやも田安の殿様が彼を儒官として召しかへようとせられました時、『私は幕臣です。たとへ田安家は將軍の御一門でも、將軍の命なくしては絶対に他家に仕へません。』といつて、おことはりしたほどの人物です。私を信用することが出来なかつたらお止めなさい。しかし寒泉ほどの學者は恐らく二人とありますまい。」

雉岡の言葉は定信の心を深く感動させた。

寛政元年、寒泉五十歳、九月拔擢されて幕府の儒官となり、祿米二百俵を給はつた。

彼は柴野栗山と力をあはせ、大學頭林信敬を輔けて昌平校の學規を立て、學問振興に力をつくした。幕府は翌年異學（朱子學以外の學）を禁じ、三年九月には尾藤二洲を登用した。そこで聖堂の面目も漸く革まり、學徒は皆朱子學に向ふことになった。時の人は寒泉、栗山、二洲の三人を「寛政三博士」と呼んで尊重した。

(三)

夕こえんものとはいかでかねてより

思ひつくばの 山の下道

常陸の國の代官に任ぜられた寒泉は、巡視の一日、暮れかけた筑波山のふもとを通つてこんな歌をよんだ。

うち續く失政と天災の爲に、常陸半分の一帯の幕領は疲弊の極に達し、廣い耕地も今はたゞ荒れるにまかされてゐた。五十五六の老齡では、この寒村の復興も日暮れて道遠き感に堪へなかつたであらう。領民はいつの間にか自暴自棄となり、風俗はみだれ、ゆすりかたりが横行し、ほごこす手のない有様で、來る代官、來る代官も殆んど二年とは

完全に勤まらなかつた。

「いくら學者でも、常陸の代官だけは勤まるまい。」
 そんなかげ口を耳にしながら、寒泉は毎日うみもせず村から村へわらちがけで廻つて歩いた。

「わしの祖先はお國の爲に命を捧げられた。善同公はこれ以上の苦勞をして善政をし
 かれたのだ。岡田家の名譽にかけても悪風を改めて見せるぞ。」

彼は幼き日の母の教訓を胸に浮べながら、いつもかういつて自分の心に言ひきかせた。
 よしその意氣は燃えるやうであつたとは言へ、六十に近い老代官が焼けつく夏の日、み
 ぞれする冬の日、村々を廻り歩く姿は悲壯であつた。彼は先づ領民に教へた。

「ばくちを止めよ。ゆすりをするな。僧侶は佛の道をよく守れ。」と、
 そして更に、

「荒地を拓け。飢饉に備へよ。」と熱心に説いた。

寒泉が代官となつてから、いつの間にか數年たつた。

寒泉のまごころは、すさんだ領民の心を動かした。積年の悪風だつた僧侶の行ひも自

ら改まつた。

「荒地を開墾したものはお手當金が貰へるさうな。五作は新田を作つてお手當金を
 貰つた上、今年は二十俵も米を取つたさうな。」

かうした話はどの村にもあつた。

誰も彼も朝早くから野に出て鍬を振つた。農民には働くことの樂しみが次第にわかり
 希望がわいて來た。

有難いことに來る年も來る年も豊作が続いた。

「代官様は常陸の生き神様だ。」

しかし寒泉の心は決して驕らなかつた。不作の年があることも考へないで豊作の喜び
 に酔ふ農民があはれに見えた。彼はいつ襲ふとも知れない飢饉に備へるため、村名主に
 命じ、とり入れた稗を無理にたくはへさせた。

また寒泉は産業を興すには人口を増さなければならぬと思つた。そして

「子供はお國の寶だ。一人でも多いほどよいのだ。子供のあるものには特別手當金を
 與へることにしよう。」

と申渡した。この珍らしい子寶手當によつて、子澤山の貧乏人は救はれ、領内の人口は年々増加していった。

寒泉は領民に對して思ひやりが深かつた。しかし、私情のため法を曲げることは、かつて一度もなかつた。

それは領内を巡視した或秋のことであつた。村人が口を揃へて、

「今年是不作でお定め年貢をお納めすることが出来ません。お慈悲をいたゞきたいと思つて鎌を入れずに待つてゐました。」と言つて年貢を減らしていたゞくやうに願ひ出た。

「いや、私は今朝からこの村の出来榮えを見て廻つたが、隣村と比べて決して悪くなくむしろよいと思つてゐるくらゐだ。心配せずに早速鎌を入れて刈取れ。」とさとしたが、農民達はいつかう聞き入れようとはしない。

「若し實際收穫がなかつたら、後から何とかしてやる。」とすかして見ても、「負けてやる。」とはつきりしたお言葉を頂くまでは。」とくりかへして聞き入れない。

「それほど言ふなら仕方がない。この寒泉の眼が狂つてゐるか、お前たちの言分が過つてゐるか試すでしょう。」

といつて、農民達が特に不作と思つて選出された田の實地検査を行つたところ、豫想以上の收穫があつたので、農民達は恐れ入りひたすらわびた。

「お上の眼に狂ひがないことがわかればそれでよい。これはこの村へ私の志としてつかはすから。」といつて金四兩を與へた。

鹿島郡のある村を巡視した一日のことである。

その村には金藏といふ百姓があつた。彼は貧乏でその日の食物にもこと缺くほどであつたが、七十餘才の老母につかへ、孝行者よと村中のほめ者になつてゐた。

「この頃子寶手當といふまことに有難いお觸れが生まれて、皆生きかへつたやうに喜んでゐます。金藏には子供がありませんが、孝行の徳に對して特別子寶手當を惠んでいたゞきたいものです。」

村名主は金藏の孝行をこまごま語つた後、かう言つて歎願した。

「孝行者は國の寶である。金藏の孝行はまことに感心であるが、法を曲げるわけにはいかぬ。子のない金藏に子寶手當をやつたらお上をあざむくことになるではないか。」寒泉はその切なる願をしりぞけたが、別に金一封を興へてその徳を賞した。

更生した常陸の幕領では、寒泉を神様のやうに尊び又慕つた。鹿島村には「岡田大明神」として彼の祠が建てられ、領民は代る代る參拜した。彼は生きながら神に祭られたのであつた。しかし思へば長い間の苦勞であつた。

「母上、私はなすべきことをなし終へました。」
彼は母の靈に合掌してかう云つた。

重い務をなし遂げた寒泉は老齡の故を以て幕府に辭職を願ひ出た。いつか傳へ聞いた領民は、驚いて老中松平信明の邸にいたり、

「岡田様は常陸五萬石の神様です。どうか今迄通りお世話下さる様に。」

といつて歎願して止まないの、幕府も寒泉の願意を許すことが出来なかつた。

寒泉はこの後なほ數年病身をおして其の職に止まつたが、文化九年七十二歳、昌平校

の講師の職と共に、その退職の願が聞き届けられ、老後を好きな讀書に送ることが出来た。常陸の領内にはその後功德碑、石祠、寒泉塔など建てられ、彼の徳は長く慕はれてゐる。

二 加藤 歩 簫



加藤歩簫は又蘭亭とも稱する。寛保三年飛騨國高山に生れた。幼少の頃より學を好み、漢學、國學、經典、書畫等を學んだ。明和八年、同志を集めて國學及び俳諧の研究をし、又初めて飛騨に寺小屋を開き、或は今日の圖書館ともいふべき文庫を設けるなど飛騨の文教を盛にした。享年八十五。大正十五年子孫によつて編纂せられた「蘭亭遺稿」は、昭和二年畏くも天覽の光榮に浴し、次いで昭和三年十一月十日、特旨を以て從五位を追贈せられた。

(一)

山の都高山の町は、山王祭に今日もにぎはつてゐた。山の頂には雪がまだらに残つて居り、堤の櫻のつぼみもまだ色づいてゐなかつたが、春の日はうららかに照つてゐる。冬の寒さがきびしいだけに、山の人たちにとつては、春がかくべつたのしかつた。乾いた町すちを下駄で歩けるのが、人々にはいかにも楽しさうに見えた。ぬるんだ宮川の水には、着飾つた女の子やきれいな山車の姿が、繪のやうにうつゝてゐた。

しかし、こゝ二之町加藤家の蘭亭と名づけられた一室は、ひっそりと静まりかへつて窓邊には歩簫がひとり文机に向かつてゐた。机上には、父の遺稿でもあり、かつは自身の覺書でもある一綴りの「紙魚のやどり」が置かれてあつた。

歩簫は靜かに初めの方をめぐつた。そこには十五年前になつた父の手で、高山の町に起つたさまぐの出來事がくはしく記されてあつた。父が存命中、ありのまゝの世のさまを書き寫して、子孫に鑑にせよとて残したものである。歩簫は、この年になつて父の深い愛情がしみじみ有難く感じられた。寺小屋で眞劍に自分たちを教へてくれた頃のあのいかめしい父の顔が、何ともいひやうがなく懐しく思ひ出される。

「寛政八年三月十五日、ロシア船、我が北邊にあらはると聞く。」

歩簫は今日役所で役人から聞いた事を、新しく書きそへながら、かつてない興奮を覺えた。長い間續いた太平の日本に、何かいひしれぬ魔の手がのびて來るのがひし／＼と感じられた。それは恐ろしい事ではあつたが、新しい日本の夜明けを前にしての動のやうにも思はれる。

「お父さま、平田様からのお手紙でございます。」

息子李充の妻が、ふすまをあけて文箱を置いて行つた。手紙は、雲橋社の一人平田長等からのもので、近日開く筈の蝶夢百ヶ日追悼の句會について指示を受けたいとの事であつた。

「蝶夢先生の百ヶ日」

手紙を巻きおさめながら、歩簫は師蝶夢のことを懐しく思ひ起した。自分がまだ若い頃、俳句を學ぶことによつて、人としての生き方を求めようとしたが、その頃世に行はれてゐた俳句は不真面目な、又技巧的なものが多かつた。正しく美しい俳句の道を求めて、同志と共につくつた雲橋社も、これを導いてくれる人がなかつた。日本中あちこ

ちと探し求めた末、この人ならと一同歡喜していただいた師が蝶夢先生であつた。蝶夢先生は、元祿の昔芭蕉がひらいた正しい美しい俳句の道を、たゞひとり歩いてゐられた。そして、眞剣な自分達の意氣に感じられてか、もつたないくらひ親切に教へ導いて下さつた。しかし、自分は二十九歳の時入門してから去年五十三歳に至るまで、二十五年間も師事しながら、一度もお目にかゝることが出来なかつた。同門の人々は、京大阪へ商用や見物に出かけた序によくお目にかゝれたが、自分は一番右に立つ身でありながらよく足を病むので京へも上れず、つひに一度もお目にかゝれなかつた。何時かは、と楽しんでゐたのに、それも果されずとう／＼恩師は昨冬永い眠りにつかれてしまつた。

面影もしらぬ師走の魂祭

これは師の死を知つてよんだ句である。師は道に對してはきびしかつたが、一面まことに愛情の深い人であつた。句をお送りすると、さまざまの手きびしい批評を加へられたが、しかし、自分の父や母のなくなつた時には、實に深くいたはつて下さつた。十年前の高山の大火の際、早速安否を問はれたので家がすつかりやけてしまつたことを申上げると、

「世の中の難儀に出あつて、心がくぢけるやうではとても俳句の道もおぼつかない。どんな艱難かんなんにあつても生きぬかうとする眞剣な道、これが人の道であり、又俳句の道だ。」

と、かつは慰め、かつは勵まして下さつた。又雲橋社で書物をあつめた際も、するぶんとお力を貸して下さい。今日日本でも他にあまり例を聞かぬ文庫をこの山の町に設けて五百余种一千余巻の書物をあつめることが出来たのも、師の助力があつたればこそである。殊に有難かつたのは、國學の師伴蒿蹊はんかうけい先生を紹介して下さいたことである。蒿蹊先生によつて自分たちは我が國の古い正しい姿を知り、皇國に生れた喜びを今更のごとく感ずることが出来たのである。

初空や伊勢はかはらぬ日の光

元旦によんだこの句は、この喜びをあらはしたのであつた。

歩簫は、夕暮もわすれて師の追憶つゆおくにふけてつてゐた。遠くの岡本の山々には、卯の花がほの白く暮れ残つてゐた。師の死をうけた時、あの山々には雪で埋まつてゐたのに、今はもう卯の花が咲いてゐる。あたかも、きよらかであつた師をしのべとさそふかのやうに。

歩簫は、筆に墨をふくませると、白紙の上にさら／＼と書いた。

雪の後卯の花しろし百ヶ日

(二)

それから三十年の後、やはりこの室に八十五歳の歩簫はしづかに床に伏してゐた。雪の朝のせい、室内はなんとなく明かす。床の間には、数十年間書き續けて来た「紙魚のやどり」の稿がうづ高く積まれてあつた。歩簫は眼を見開いて、壁の定書さだめがきを讀んだ。

例の事

凡そ内外ないぐわい鶏初めて鳴く時起き、

盥たらひに手水し、

口漱くそぎ衣服し、

尋常尊重の神佛及び家祖歴代有縁うゑんの靈れいを念ねんじ、

次に堂室及び庭を掃はき、席しを布しき

次に昨日の事を記、多端たたんならば
日中に可記

次に粥かゆを服し、

次に頭を梳すき、三ケ日に一度、日々には不梳

次に手足の爪を除き、丑の日手の爪除、寅の日足の爪除

次に日ひを擇えらみ木浴もくよくす、五ケ日に一度 各其事に従ふ。

これは事なり、事理じりもとより二つならず、外相げさうそむかざれば内證ないしやう必ず熟じゆくす。あふぎて是を尊たむべし

し羅々老人(歩)

それはもう古くよごれてはゐるが、自分はこの七日に床につくまで、毎日欠かさずに實行して來た事だけに、昨日も今日も出來ないのが何となくさびしかつた。幼い時から病弱の自分が、かうした長い生涯を保てたのは、全く規則正しい生活のためのものであつた。

歩簫には刻々近づく自分の死が分つてゐるが、心には一切のわだかまりがなかつた。國學の方は田中大秀がゐるその志を繼いで呉れる。漢學の方は門人赤田臥牛あかたふしうが先年なくなつたけれども、その子章齊しやうさいは父に劣らぬ立派な學者である。俳句の方は李充りちゆうがうけつ

いでゐる。飛驒の文教はいよいよよさかんにならうとしてゐる。又李充はよく自分の志にかなひ、一身一家の利害を忘れて、世のため人のために盡くしてゐる。かう思ふと歩簫は何となくほゝえましくさへ感じられた。しかしたゞ一つの心残りがあつた。それは外國の手が迫つて來つゝある皇國の將來であつた。

何處か遠くの方から、

「薪はどうぢやな。薪はどうぢやな。」

といふ聲が聞えて來た。その聲を聞くと歩簫はふと何年か前に見た年木賣としばりの親子を思ひ出した。牛の背に一ぱい年木をつんで賣りに行く父らしい人と、町の土産に風車などを買つてもらつてついて行く幼い子との姿が、妙に頭にこびりついてゐたのである。歩簫の歌心は動いた。

七つ子の坊も牛牽く年木かな

連れあるく坊はわが子か年木賣

かう二句つぶやいてゐる中に、これが最後の句かも知れないと思つた。十五歳の時から歩みつけて來た俳句の道、それは自分の人生でもあつた。自分はその道をひたすらに

生き抜いて来たのである。昨日門人達が辭世の句を、それとなく求めた時、

「私は芭蕉さまのおつしやつたやうに、今更、この期に臨んで特別に辭世などを残さうとは思はない。」

と言つた言葉を思ひ出した。

晝近くなつたか、日は照りあがつて軒端の雪もとけるらしい。かさりと落ちる音が時々聞えた。

(三)

步簫はそれから五日後の文政十年十二月十四日、師蝶夢に後七日といふ日、永い眠についたのである。

今高山市東山法華寺の裏山に、步簫の魂が安らかに眠つてゐる。傍には、「贈從五位加藤步簫之墓」と立札がかゝけてある。位階は長くも先年大正天皇より、世のため人のために盡して皇國の發展に力を捧げ奉つた步簫の功績を思召されて、授け賜はつたものである。

三 江馬蘭齋



江馬蘭齋、幼名を庄次郎といひ、字は元恭げんきゆう後春齡しゆんれいを通稱した。蘭齋はその號である。延享四年大垣に生れた。本姓鷹見氏。幼時書道を江馬元澄に學んだが、元澄は庄次郎の秀才なるを識つて、これを養子とした。

生れつき學問好きの彼は、日夜力を漢方醫學の研究に用ひた。元澄の死後その後をついで大垣藩の侍醫となつたが、四十七才にして江戸に赴き、前野蘭化の門に入り、これより専ら蘭方醫學を學んだ。大垣に歸つてからは、獨學でますます研究を続け遂にその奥義を極めた。蘭齋はまた關西に西洋醫學をひろめた最初の人であり、我が醫學界の恩人ともいふべき人である。文化四年三月、再び藩侯に仕へ、一度養子元弘に家を譲つたが、再び醫業に従つた。後、家を孫元益に譲つて身をひき、天保九年七月八日、九十二歳で病死した。大垣藤江禪林寺に葬られた。

その著作した醫學書類には、五液診法、泰西熱病集譯論、水腫全書、和蘭醫學問答等があり、他に論語訓詁解二十卷、好蘭齋隨筆三卷もある。

(一)

南面した明かるい書齋で、蘭齋は書見之餘念がない。書見臺の前に端坐したまゝ、もう長い時間身動き一つしないのである。床の間に生けた水仙が、この静かな部屋に生彩をそへてゐる。

やがて襖が靜かにあいて、妻なる人からの食事の知らせがあつた。しかし蘭齋は生返事をしたまゝ立ち上らうとしない。ただ一心に讀みふけて、食事のことも思はないのである。

しばらくして今度は、かはいらしい女の子がどやどやと入つてきた。長女の多保子と次女の拓植子である。

「おとうさま、ごはんですよ。」
六才の多保子がさう言つて促すと、四才の拓植子も「おとうさま。」「おとうさま。」と言

つて、父をせき立てる。

「なに、もうおひるかな。」

蘭齋ははじめて氣がついたもののやうに、慈愛にみちた笑顔で、二人の子供の手をと

りながら、靜かに立つて晝食の膳に向かふのであつた。
讀書に熱中すると食事も忘れる。それ程篤學な蘭齋であつた。したがつて自分の専門とする和漢の醫書は、ことごとく讀破して、なほ良書に乏しいことを、いつもなげいてゐた。この上は斯道のために、精魂をこめた良い書物を自分で著したいと思つた。「太平故聖惠方百卷」を著して、これを世に贈りたいとは、蘭齋かねがねの願ひであつたのである。

しかしこれはなかなかの大事業である。もとより蘭齋には、その覺悟は十分にあつたのであるが、たまたま蘭齋にこの企を思ひ止まらせる程の大きな變動が醫學界におとづれた。それは、江戸における和蘭醫學の流行といふことである。

(二)

當時江戸では、有名な前野蘭化・杉田玄白等を中心として、和蘭醫學の研究が大いに

盛んになつてゐた。

それにつれて、和蘭醫學に對するとかくのうはさも流れ、毛唐人の行ふ魔術といつて恐れいやしむ人も多かつた。しかし蘭齋には、漢方などの及ばない進歩した醫學であることが、次第にわかつてきた。そしてこの新しい西洋の醫學に強く心をひかれ、果ては江戸に出て、師について新醫學を研究してみたいと思ふやうになつた。

「だが、自分はまだ四十七だ。餘りに年をとり過ぎてゐる。この年で江戸へ出たからとて、どれ程の研究が出来るであらう。」

蘭齋はさうも考へてみた。なるほど四十七といへば、新しい研究を始めるのには、餘りに年をとり過ぎてゐる。しかし蘭齋の胸中には、年を省ない若若しい向學心がまたしても湧いてくる。それが一刻もじつとして居られない程、はげしく心をかり立てるのである。

「よし、萬難を排して江戸に出ることにしよう。八十の手習ひといふこともある。まだまだ年を考へてゐるときではない。」

かう決意した蘭齋は、藩侯の許を得て、寛政四年六月、勇んで大垣を立つて江戸に赴

いたのである。

それから直ちに前野蘭化の門に入つた。蘭化の弟子には年若い人人ばかりがある。さういふ若い人達にまじつて、蘭學の初歩の手ほどきを受ける自分の姿が、いかにもみじめに思へた。さうして志を立てることが、あまりに遅かつたことが悔いられてならなかつた。

或る日師の蘭化の前に出て、さうした自分の心境をしみじみと述懐した。

「志を立てて、先生のお教へを仰ぐことの出来る身を、まことに仕合せに存じますが、私は四十七歳の老齡で、勉學の時を逸して居ります。なぜもつと早く斯の道に志を立てなかつたかと、それが残念でなりません。それに、この年になつてはじめて手をつけるやうなことで、奥深い蘭學の研究が將來どれほど進むことが出来るでせうか。省みて不安でございます。」

師の蘭化はこれを聞いて深く同情した。しかしそのことは少しも心配するには及ばぬと思つた。自分の過去をかへりみても、この蘭齋と同じやうな道をたどつてゐるのである。これほどの篤學の人にして、年齢のために學業が成就しないことは決してないと信

じた。

「いや、その御心配は無用である。實は、私が蘭學の研究に志したのも、ほぼあなたと同じ年頃であつた。學の成ると成らないとは年齢によるのではなくて、その人の努力の如何にあることは、この私が身を以て経験した所である。四十七歳で郷里を出でて江戸に學ぼうとするその意氣がすでに尋常でないのだ。その意氣でたゆまずつとめたなら、必ず學の成就する日が到來すると私は信じてゐる。」

かういつて蘭化は、この年多い蘭齋をはげました。さうして殊の外その志を愛でて、ねんごろに教へてやつたのである。

蘭齋は師の厚い心に感激した。さうして齡を忘れ、家を忘れて、ただ一すちに和蘭醫學の研究に没頭していつた。勉學に目ざましい進境をみせたことは言ふまでもない。

かうして二ヶ年蘭化に師事することによつて、蘭學研究の正しい基礎をしつかりきづき上げた。そこで、師にいとまを乞うて郷里大垣にかへり、その後は獨學で蘭方醫書の研究に手をつけたのである。

研究を重ねれば重ねるほど、蘭方醫學の偉大さには心服せずには居られなかつた。そ

して、我が國に於ては、近く蘭方が漢方に代つて行はれる時が必ず到來するものと、蘭齋は堅く信じたのである。

しかし、蘭學の全然行はれてゐない大垣にあつて、ただ一人その研究に従ふことには容易ならぬ困難がともなつた。これらの困難を、一つ一つ克服して研究をすすめていく蘭齋の奮闘ぶりは心ある人をしてただ感嘆させるばかりであつた。いつの間にかそのことが藩侯の耳にも達し、特に手あついほめ詞をたまはつた。このことは蘭齋を一層感奮興起させ、孜孜として研鑽にいそしむのであつた。

(三)

しかし當時はまだ漢方全盛の時代であつた。蘭醫は世人に受け入れられなかつたばかりでなく、南蠻渡來の無氣味な魔術をもてあそぶものとして排斥されることもあつた。特に美濃の地はこの風が一層ひどかつた。すべての先覺者がさうであるやうに、蘭齋もまた無知な世人から冷笑を買はなければならなかつた。

「蘭方醫は亂暴醫だ。蘭齋に診察をうけようものなら、どんなひどい目にあはされる

かも知れぬ。あれは醫者ではなくて、魔法をつかふ切支丹だ。」
寢食を忘れて研究してゐる蘭齋に對して、心なき世の人人は、さう言つて毛ざらひをした。そして蘭齋の門に到つてその診察を乞はうとする者はなかつたのである。

しかし天はいつまでもこの人を不遇にしておかなかつた。或る雪の多い年のことであつた。訪れる人の稀な蘭齋の門前に、雪かき分けて一挺の駕籠が下された。それは大垣の縁覺寺からの急ぎの使者の乗つてきたものである。この雪深い早朝に、何用あつての訪れかと、蘭齋はいぶかりながら、その使者を招き入れて用件を聞くと、それは次のやうなことであつた。

日本全國にわたつて多くの信徒をもつた西本願寺の門主が、病にかかつてもう久しい。信徒の心痛は一通りでなく、名醫といふ名醫は悉く招かれて、門主の脈をとり、薬をすすめたが、一向にきき目がみえない。門主の身の上に萬一のことがあつてはと、信徒の心配は増すばかりである。その時信徒の一人の信濃屋伊兵衛といふものが、

「美濃の大垣に、江馬蘭齋といふ蘭醫がゐて、大へん研究が深いといふことだが、一度試みに門主様のお脈をとらせてみてはどうだらうか。」

と言ひ出したのであつた。

蘭齋が漢方醫であれば問題はないが、如何に名醫とはいへ、蘭方醫の手に門主のお脈をとらせることは、數多の信徒に對しても、大きな問題であるといふ意見が多かつた。そこで家老や用人達一同がいろいろ評議した結果、遂に、

「蘭齋に治療をうけるかうけないかは第二の問題として、それ程診察がうまいなら、ともかく門主様の御容態を篤とうかがはしてみよう。」

といふことになつた。そこで、大垣の縁覺寺を介して、蘭齋に直ちに京都へ上るやうにとの使が送られたのである。

無言のまま使者の言葉に耳をかたむけてゐた蘭齋は、藩主のお許しさへあれば、直ちに上洛して門主の容態を見舞はうと、快くお引き受けしたのであつた。

やがて蘭齋は藩主の許を得て、(寛政十年)二月三日、弟子三人に従者數人を従へて大垣を出立し、二月五日に無事京都に着いた。

大垣の江馬蘭齋が、門主の病氣を見舞ふために上京したといふことを聞いた都の人達は、いろいろなことを噂してさはぎ立てた。

「蘭齋は蘭方醫で、それは亂暴醫だ。あんなものに御門主様の脈をとらせることは危険千萬だ。」

多くはかういつて、蘭方醫の蘭齋の來たことを、腹立たしい思ひで不服をとなへた。かういふ巷の聲は蘭齋の耳にもはいつたのである。しかしその心はいささかも動搖しなかつた。長年研究を積んだ學問には、かたい信念をもつてゐた。謹んで門主の病氣を診察した蘭齋は、門主の求めに應じて、處方箋を書いて上げたのであつた。

門主は蘭齋の自信にみちた態度と、誠意ある診察ぶりに、深い信賴の情をよせられ、早速侍醫に命じてその處方箋によつて藥を調合させてそれを服用せられた。すると果して門主の重病が、薄紙をはぐやうに快方にむかつていつたのである。

門主の喜びは一方でなかつた。そして蘭齋の勞をねぎらつて、白銀百枚と羽二重五疋を下された。

しかし蘭齋にはかうした厚い謝禮よりも、蘭方の眞價を都の人人に思ひ知らせることのできるのがこの上なくうれしかつた。

蘭齋は望まれるままに、翌月まで滞在して、門主の病氣を全快させ、三月五日暇をたまはつて大垣へかへつた。

このことがあつて以來、蘭齋の名聲は一時に高くなつた。世に類なき名醫として、はるばる訪ね來つて治療を乞ふ病客が次第にまして行つた。そればかりでなく、蘭方に對する世人の考へ方が、すっかり改つてきた。殊に蘭方を切支丹の魔法の如くみなして忌みきらつた關西一帶の人人の間に、この時以來始めてその眞價がみとめられるやうになつた。

かうして蘭齋は名醫の名をほしいままにしながら、惠まれた晩年を送つた。しかもその旺盛な研究心は、老年に至つても少しも鈍ることなく、孜孜と勉めて倦む所がなかつた。

長女細香女史は、父蘭齋のこの絶倫な姿を感嘆して「冬夜の詩」と題して、次の如くその面目をつたへてゐる。

爺緋ニ歐蘭書。 兒讀ニ唐宋句。 分此一燈光。 源流各自沂。
爺讀不知休。 兒倦思ニ栗芋。 堪愧精神不及爺。 爺八十眼霧無。

四 林 述 齋



林述齋は明和五年六月、岩村藩主松平能登守乘蒞のりもりの三男として江戸に生まれた。幼名を熊藏といひ、生れつき賢い上によく學問に勵んだので、その名は忽ち天下にひびいた。

林家は羅山以來學問を以て家名を擧げ、代々江戸幕府に仕へ、大學頭のりもりとして學政に當つてゐたが、林信敬のりもりの死後は子がなかつたので、幕府は述齋に林家を嗣がせた。時に述齋は二十六歳であつた。述齋は大名の家に生まれただけに性質も強くすぐれてゐて天保十一年七十四歳で死ぬまで大學頭の職にあること四十九年に及んだ。その間、我が國の學問を振ひ興すことに大いに力を用ひ、昌平校の規模を大きくし、多くの立派な人物を育て又幕府の重要な政治にもあづかるなど、その功績は非常に大きかつた。幕府は述齋の功を厚く賞してそれまで林家の祿高一千五百石であつたのを三千五百石に加増した。大正天皇は述齋の學界に於ける功績に對

し長くも從四位を賜つた。

(一)

中央線大井驛から南へ明知線を約十軒程はいつた所に、岩村といふ四方山に圍まれた靜かな町がある。今から凡そ七百年前、こゝに要害堅固なお城が築かれた。不思議なこゝには若し敵から攻撃されるやうなときには、霧がたちこめて城を蔽おほひかくすといふので、霧ヶ城と呼ばれた。それから數百年、このお城をめぐつて度々戦争が起り、夢のやうなさまざまの傳説も生まれた。今は僅かに苔むす石垣のみしか残つてゐないが、こゝから見下す岩村町は風光うるはしく、私たちにいろ／＼と昔の出來ごとを懐しく思ひ起させる。

江戸時代には、松平氏といふ三萬石の大名が、こゝの城主として附近一帯を治めてゐた。代々の殿様は皆學問が好きで、知新館といふ學校をたて、學問を奨励したので、こゝからは立派な人が多く出た。その中でも林述齋先生と佐藤一齋先生とは特に有名である。

今から百七十年ほど前、岩村城第十代目の殿様能登守乘蒞のこのかみのりもりといふ人に、男の子が生れた。名前を熊藏ゆうぞうといひ、生まれつき賢かつたが、身体が弱く病氣がちだつたので、父の乘蒞は、よその子供を貰つて後を嗣ついでがせることにした。ところが、熊藏は十歳ぐらいからだんだん丈夫になり、本を読むことが大好きで、毎日朝から晩まで勉強するやうになつた。それで父はこの子を學者にしようと思へて、偉い先生を迎へて熊藏に學問をさせた。この先生は間もなく死なれたが、熊藏はその後も忘ることなく一人で勉強にはげみ十七歳の頃には、日本や支那の有名な本はほとんど全部讀んでしまつた。又詩を作ることが大へん上手で、一夜に立派な詩を百も作つて人々を驚かしたといふ。

しかし、年が若く元氣一ぱいな熊藏は、自分の學問の出来るのに心がおごり人の教へも聞かないやうになつて來た。偉い學者があるといふうはさを聞くと、「何、たいしたものではないさ、おれの方から教へてやらう。」といふやうな氣持で、その學者を訪ねては大いに議論し、いろいろ理窟りくつをならべて相手がひつこむまでは止めなかつた。こんな風になつてしまつては、何事でも進歩は見られない。心ある人々は「見込のある青年であるが困つたものだ。」と熊藏のために惜しんでゐた。

或る時、熊藏は例の如く、鼻高々と澁井太室しぶみたくといふ學者の家へ出かけて行つた。今日も一つ太室先生を負かしてやらうと思氣込んで待つてゐると、先生は靜かに出て來て、無言のまゝじつと熊藏を見つめられた。その先生の眼には、深い人格の力が自づとあらはれ、何ともいへない強い光がこもつてゐた。熊藏は何か物を言はうと思つても、どうしても言ふことが出来ない。たゞ頭が下つて行くばかりであつた。そのうちに、さすがに心おごつた熊藏にも、自分のはしたない心を反省する氣持が湧上わきあつて來た。「あゝ、自分は少しばかりの學問を鼻にかけて威張つてゐた。全く井戸の中の蛙であつた。」と深く恥ぢ入つた。

それから熊藏はすつかり心を入れかへ、生まれかはずなすなほな心で先生の教を受けた。熊藏は先生から書いていただいた「溫恭慎德おんきやうしんたく」といふ言葉を清書して軸物じくぶつにし、書齋にかけて、日夜これを見ては修養につとめた。「溫恭慎德」といふのは「人はおだやかでつゝしみ深くし、常に徳をみがかねばならぬ。」といふ意味である。この頃から、熊藏の學問がめざましい進歩を見せたことは言ふまでもない。

(二)

徳川五代將軍綱吉は、大そう學問がすきで、大名たちを集めて自分から、書物を講義して聞かせるほどの熱心さであつた。それで、全國から偉い學者が多く出た。林信篤もその一人で、江戸で學校をおこし、多くの子弟を教育した。綱吉は、その學校を大きくして昌平校と名づけ、朱子學を正しい學問と定め、ここを教育の大本山とした。そして信篤の子孫が代々大學頭に任ぜられて校長の職を嗣いだ。信篤から數代の後、信敬といふ人に子供がなく、あとつぎのきまらない中になつたので、幕府は、次の大學頭となる人物を天下に求めることになつた。大學頭となるのであるから、その人物は學問はもとより徳に於てもすぐれてゐる人物でなければならなかつた。

「過を犯した時は、いさぎよく改めて、二度と犯してはならない。」とは、支那の聖人孔子のことばである。この言葉を實際にまもつたのが熊藏で、澁井太室先生に戒められて以來、自分の行ひをよく反省し、だんだんと人格を深めて行つた。そして數年ならずして、學徳共に備はる立派な學者となつてゐた。

幕府はつひにこの人に目をつけた。使を立てて熊藏に「大學頭となつて學政を擔任せ

よ。」と命を傳へた。熊藏はその責任の重いことを考へ「私のやうなものにはお受けいたし兼ねます。他に適當な偉い學者がたくさんあることでせう。」と、ごじたいしたがい是非にとのことで、つひに引受けることとなつた。林家を嗣いで名前を述齋と改め、大學頭となつた。時に年僅に二十六才のことであつた。

(三)

文化八年、朝鮮の使が我が國へ來ることになつたので、幕府は林述齋等を對馬に遣して、これと對面させることにした。述齋は大勢の人々と共に九州まで下り、そこから船で對馬へ渡らうとした。その日はあひにく風強く浪高く、外の人たちはもとより、船頭まで恐れて、

「これでは、とても船は出せません。海のしづまるまで待ちませう。」
といつて、出かけようとしなない。述齋は、

「朝鮮の使はもう對馬へ來て、われわれを待つてゐる。これくらいの風波で日をのばすとは日本の國の面目にかゝはる。」

と聲をあげまして人々を叱り、自ら進んで船へ乗込んだ。外の人たちも船頭も、止むなく出かけることになつた。沖へ出ると風は益々強く浪はいよいよ高い。雨さへ加はつて船は木の葉のやうにもみにもまれた。皆は、あちこちに舟酔ひをして倒れ苦しみ、生きた心地もしなかつた。が、述齋だけは、あわてず騒がず對馬の方をにらんで正座し、しづかに神を念じてゐた。やがて、海神も述齋の心に感じてか海もしづまり、一行は無事對馬に上陸し、重大な使命を果たすことができた。歸りには瀬戸内海を船で戻り、大阪より京都に上つて御所を拜觀して江戸へ歸つた。後、同行の人たちが、

「先生は船にお強いですね。あんなに揺れても氣持が悪くありませんでしたか。」
とたづねると、述齋は、

「誰だつて船の揺れるのは氣持のよいものではないよ。しかし、私は重大な役目を帯びてゐるのです。腹の中は公務で一ぱいで外に何もはいつてゐないから、吐かうにも出すものがなかつたのだ。」

と言つて笑つた。述齋が、どんなに責任を重んずる人であつたか、又平素如何に修養してゐたかと思はれるではないか。

(四)

文化、文政兩年間は、殊の外世の中も太平で、學問も盛んであつた。しかし、その反面、どうかすると人々の心が弱々しくなり、古來大和魂のあらはれといはれた武士道も衰へがちであつた。文武共に勝れた人こそ眞の偉人であり、文武共に榮えてこそ國も強くなる。荒海も恐れなかつた述齋だけに、當時の學者の中にも武士道知らない人の多いのを見て大そう残念に思つた。されば「平和な時でも、武を鍊ることを忘れてはならぬ。」と、門弟を常に戒めはげました。

或る時のことであつた、江戸城に上つて將軍に本の講義をしての歸り、城門の番所へ立寄つた。そこには、鐵砲や槍などが澤山並べてあつたが、皆赤くさびついてゐた。

「鐵砲や槍は、さびてゐても役に立つものと見えるな。」

と述齋は言つた。番人はすつかり恐れ入つて、たゞちに武器の手入をした。このことが外の番人にも聞えたので、皆驚いてそれ／＼武具の手入れに身を入れるやうになつたといふことである。

(三)

年を重ねるにしたがひ、述齋の學問は益々進み人格はいよいよ深まつた。將軍の信頼は一そう加はり、人々の尊敬も亦多くあつまつた。五十歳の時に、昌平校を大いに改めた。門人も千人を超え、今までにない盛んな學校となつたので、世の人々は林學中興の師と仰いだ。全國の大名も争つて教を請ひ、政治上の事についてもその意見を聽いた。有名な白河樂翁松平定信は、述齋を最も尊敬した一人であつた。

功成り名遂げた述齋は、天保十一年七十四歳の時、職を子に譲つた。その時、同じ岩村藩出身の學者佐藤一齋に、

「私は四十九年間、重い職に就いて大した過もなく國家に御奉公が出来たが、これは全く『正』の字と『公』の字の賜である。」

と語つた。そのことばの如く、述齋は一生の間、常に正しい心を以て終始して、苟くもまがつたことは少しもしなかつた。又、私の都合とか私の爲とかを考へることなく、「公」に盡くすことが第一である、と常に口にしてゐた。滅私奉公といふことばを、文

字どほり實行された人であつた。

職を退いてからも、何か御奉公したいと考へ、熱心に本を書きつゞけた。述齋の著した本は實に一千卷にもものぼつてゐる。述齋が病氣にかゝると、將軍は度々使をやつては見舞はれた。かういふことは學者としては珍らしいことで、述齋は感激しながらつひに七十四才でなくなつた。

述齋が學問の發達に盡くした功績に對し大正四年十一月十日、特に從四位を賜つた。述齋の光榮これに過ぎるものはないといはねばならぬ。

五 佐藤一齋

佐藤一齋は安永元年十月、江戸の岩村藩邸に生まれた。幼い時から讀書を好み、中井竹山・皆川淇園等の名高い學者について、一心に學問を勉強した。十九歳の時始めて藩主松平乘瀧の近侍となつたが、その頃から若君(後の林述齋)と、學問の上で親しく交つた。林述齋が江戸の昌平校の長官になると、一齋はその塾長に引上げられ、門人達を熱心に教へ導いて、昌平校の發展につくす所が多かつた。朝鮮の使者が我が國に來た時には、述齋に従つて對馬まで應接に行つたことがあり、又外國へ送る文書をつくる時などは、いつも述齋のよい相談相手になつたりして、内助が大きくはたらいてゐた。又幕府の命をうけて、海防のことや政治のことに大いに力をつくしたので、その名聲はいよ高くなつて、尾張侯、水戸侯を始め、一齋を迎へてその教へを受けようとする大名は、數十家もあり、一般の人々でその門に學ぶものは、三千人にも及んだといふ。大正天皇は一齋生前の功を嘉し給うて、特に従四位を追贈あそばされた。

(一)

武儀郡美濃町に鉦尾山城の趾が今なほ残つてゐる。當城は藤原鎌足の血をひく名門で

織田信長に仕へた佐藤六左衛門清信の築いたものである。佐藤氏は關ヶ原の戦後浪人して江戸に住んでゐたが、やがてこの家から周軒といふ人が出て、偉い學者になつた。

その頃、東濃の岩村城主松平氏は知新館といふ學校を建て、熱心に藩中の子弟を教育してゐたが、何とかして天下に有名な學者を迎へたいと、いろいろ骨折つた結果薦める人あつて、佐藤周軒を聘することになつた。周軒は、なつかしい祖先の郷里である美濃の殿様からの願ひなので、よろこんでそれをお引き受けすることにした。殿様は周軒を殊の外おうやまひになり、知新館の教育のことばかりでなく、政治上の事柄までも相談されるやうになり、つひには、岩村藩の家老としてこれを重く用ゐられた。それから後も佐藤家には立派な人が出て、知新館の教育に、又一藩の政治に、よく力をつくしたのであつた。

佐藤一齋は、かういふ立派な家に生まれた人である。幼名を信行といつたが、さすがに祖先の血をうけつぎ、幼い時から賢い所があつた。その上、なかなか勇敢な氣象をもつてゐて、武道にも怠らずはげんだ。そのため、弓・槍・劍道何でも上手であつたが、取分け柔術はすぐれて達者であつたといふ。

生まれつき賢い一齋は、十九才の時つくづく考へた。「自分はいつまでも、こんなことをしてゐてよいだらうか。男子と生まれたからには天下第一等の人物にならなければならない。」



佐藤一齋

奮然と志を立てた一齋は、將來きつと日本一の學者になることを誓つて、一心不亂に勉強した。二十一才の時、はるばる大阪に出て當時天下に名高かつた學者中井竹山の門をたゞいて入學を願つた。竹山つくづくと彼を見て、

「この青年はなかなかしつかりしてゐる。きつと將來立派な人物になるにちがひない。」

と、非常にたのもしく思つた。後に京都にも上り、又各地に偉い先生を訪ねては、その敬へを請ふたのであつた。

ある時、長崎奉行が江戸へ行く途中、東海道のある宿場まで来て、荷物を運ばせるために、雲助を呼んだことがあつた。元來雲助は毎日ばかりで、荷物を運んだり、川を渡つたりする人夫だから、どれもこれも眞黒な日にやけて、頑丈な体格の持主ばかりであるのに、その時奉行に呼ばれた雲助は、からだは青白く、仕事はすこぶる不馴れであつた。奉行は不思議に思つて、つくづくその姿を見つめてゐたが、どこかで見たことのある人体じんたいであると思つた。特にからだの青白い所は、その故に「青鬼」と呼ばれてゐる佐藤一齋によく似てゐるので、まさかと思つたが、好奇心にかられて、その雲助にたづねてみた。

「君はもしかや佐藤君ではないか。」

すると、意外にも雲助は、

「さやう、佐藤信行です。」

と、しかも少しもわるびれる様子も見せず、平然として答へた。奉行は大いに驚いて、「一体、どうして君のやうな人が雲助をしてゐるのですか。そんなことは早く止めて

私と一しよに江戸へ参りませう。着物も私があるから、これを着なさい。」と熱心にすゝめた。しかし一齋はきかなかつた。

「私は今、貧乏して雲助になつてゐる。はじめ親方と約束して使つてもらつてゐるので、この約束を果してしまふまでは、どこへも行きません。」

と答へて、どうしても承知しをかつた。そして、はだかの雲助姿で奉行の荷物をかついでお供をしていつた。奉行は、一齋が貧しくて雲助にまで落ちぶれてゐる身の上を、いたく氣の毒に思ひながらも、その心は清く美しく保つてゐることに大そう感心したといふことである。

後には偉い人になつた一齋にも、一時はかうしたどん底の苦勞があつたのである。しかし、このどん底の生活にあつても、彼は絶え間なく刻苦勉強した。そして志を立ててから十年後の二十九才の時には、九州の松浦静山といふ殿様に召し抱へられることになつた。静山は、かねて一齋の學徳を尊敬してゐたので、是非藩の家臣たちに教へてもらひたいものと禮を厚くして、わざわざ、九州から江戸まで迎へに來られたほどであつた。

(二)

一齋の住んでゐる江戸の屋敷を「愛日樓あいじつろう」と呼んでゐた。「愛日」といふのは、孝行な子が親に仕へるのに、時日がたつのを惜しんで一生けんめいにつとめるといふ意味で「孝子の家」といふことなのである。これは、一齋の父信由が、至つて親に孝行をつくす人であつたために、服部南郭といふ學者が、感心してつけた名まへなのである。

一齋は父信由にも劣らぬ孝行者であつた。父が年とつて職を退かれて後、京都・奈良方面に旅行せられた時などは、雨や風の中で随分苦しい旅であつたが、一齋は父を背に負うたり、その手をひいたりしてねんごろに世話をし、名所を次ぎ次ぎとたづねて、樂しませたのであつた。又、父は書畫がすきであつたので、江戸の名ある人々に請うて、書や畫をかいてもらつては父にさゝげ、その喜ぶ様を見て何よりの樂しみとしてゐた。かうした一齋の孝行ぶりを見て、世間の人々は誰一人感心しないものはなかつたといふことである。

このやうにやさしい子息に仕へられて、父は毎日幸福な日を送つてゐたが、八十余歳の高齡でつひに亡くなつた。父の死後間もなく母もこの世を去つた。相ついで父母を失

つた一齋は、その深い悲しみの心を書き綴つて、これに「哀敬篇」といふ名まへをつけた。哀敬篇を読む人々は、誰でもその孝心の深いのに思はず涙を流さずには居られないといふことである。

一齋はその外多くの書物を著した。そしてこの本も文章がすぐれて立派で、そのうまいことは、當時天下第一等の稱があつた。有名な詩人頼山陽は、一齋と同じ時代の人で當時の人々は「詩の山陽、文の一齋」といつた程であるが、その山陽がたび／＼自分の書いた文章を一齋の所へ持つてきては、朱筆を加へてもらつたといふことである。これを見ても一齋の文章は、どんなに名文だつたかといふことが分かるのであるが、一齋のかうした文章は「愛日樓文集」といふ本におさめられてゐる。

(三)

世に「水魚の交り」といふことばがある。昔、支那に蜀漢といふ國があつて、その國の王様の劉備といふ人が、諸葛孔明のえらさを見こんで、三度まで訪ねて行つて、頼んで自分の家臣になつてもらつた。孔明は劉備のこの上ない知遇に感激して忠誠をはげんだのであつたが、残念にも劉備は王子の幼いうちに死んでしまつた。死ぬ時、特に孔明を枕もとに呼んで

「私の子供はまだ小さいから、お前がゐてくれなければ、水をはなれた魚のやうにすぐに死んでしまふであらう。どうか自分の死後は、幼主をたすけて國をまもつてくれるやうに。」

と、ねんごろに頼んで死んで行つた。孔明は主君の遺言を守つて、幼少の王子をたすけて立派に國を守り通したのであつた。これは最もうるはしい「水魚の交り」として、今尙語り傳へられる美談であるが、一齋にもこれにおとらぬこまやかな交りがあつた。

一齋は岩村藩の家老の子供として生まれたが、主君の松平乘蒞には、一齋より四つ年上の子息があつた。これは後に大學頭となつた有名な林述齋なのであるが、この二人は幼少の頃から、とり分け仲がよかつた。毎日一しよに遊び一しよに學んで、影の形にそふ如く仲よく暮らして成長していつたのであつた。やがて述齋が十五歳になると、元服の式が行はれることになつた。その時一齋の父信由は「烏帽子親」の役目をつとめた。これは成人となる者に、冠を着けてやる人で、その儀式の中で最も大切な役目なのであ

るが、述齋はこのことがあつてから、一齋を弟のやうにみて行つた。

「烏帽子親の子供は兄弟と同じであるから、これから一生仲よく決してはなれないやうにしよう。」

と、一齋に向かつて言つた。

それから後、二人は一段と親密に交つて、兄弟同様に日夜はげましあつて、共に勉勵したのであつた。述齋が林家の後をついで、大學頭となつた時が二十六歳で、一齋は二十二歳であつた。以後四十余年間、一齋は述齋のよい相談相手となつて、その大仕事をたすけたのであるが、それは見る目にも美しい水魚の交りであつた。

一齋が七十歳の時、述齋は重い病氣にかゝつた。そして一齋に死後のことをよく頼んでおいて、どうとう死んでしまつた。一齋は、主君を失ひ、兄を失ひ、親友を失つたもののやうに、悲歎のどん底につき落された。加ふるに老年の衰へも急にあらはれるやうになつたので、これからは隠居して靜かに餘世をおくりたいと考へた。しかし述齋から頼まれた林家のことや昌平校のことを思ふと、奮起せざるを得なかつた。それに幕府からの頼みもあつたので、七十歳の老体にむちうつて昌平校の師匠となり、熱心に學問

のために力を盡す一方、林家への忠勤もおこたらなかつた。昌平校での一齋の講義は格別になりつばなもので、弟子達は終始熱心にこれを學んだ。たまたま病氣でからだは衰へてゐる時でも、講義を休んだことはなかつたといふし、時には一晩中寝ないで、熱心に弟子を教へて倦まないこともあつた。その熱心さはつひに時の將軍の知る所となり、度々厚く賞せられ、また時々特に召されて、講義を進めたこともあつたのである。

かうして江戸の昌平校はいよいよ盛大になり、天下三百の大名の中、その三分の一までが一齋を師と仰いで敬慕し、また學徳をしたつて教へを請うた門人は三千餘人に達した。中でも佐久間象山・大橋訥庵・渡邊崋山などは名高くなつた。特に崋山は勤皇家として又畫家として聞ゆる人であるが、その間は父子のやうに親しかつた。崋山が二十九歳の時描いた一齋の肖像は今も尙残つて、名畫の一つにかぞへられてゐる。

一齋は歳二十余で學者・教育家として身を立て、それ以來八十八歳の高齡でこの世を去るまで、實に六十年間を教育のために盡し通した。

「人を教へることは最も尊いことで、これは私事ではない。國家にお仕へする公の仕事である。」とは常々一齋の口にしてゐたことばであるが、かれ自身もまた身をもつ

てこれを実行した偉大なる教育家であつた。

(四)

一齋の晩年には世の中はすつかり變つてきた。イギリスやロシアの船が、我が國の近海にしばしば現れるやうになつて、國內は次第に騒がしくなつてきた。この時一齋は幕府に向かつて、重要な意見を申し上げた。

「我が國の第一の急務は海防のことである。目下大いに武士道を盛にして、海のままを嚴重にしなければならぬ。又、人々の考へや意見がまち／＼ではいけないから、皆心を一つにして國事にあたらなければならぬ。」といふ意味のことを陳上したのである。

嘉永六年にはアメリカの軍艦が江戸灣にきて、我が國と條約を結ぶことでいろ／＼談判した。この時一齋は外國文書翻譯ほんやくのことにあたつて、いろ／＼多忙を極めた。時勢を心配する門人達は、たび／＼一齋の家に集つてきたが、多くは議論に時をつひやすだけで、何となく心のおちつきがなかつた。一齋だけはたゞわけもなく騒ぐやうなことはし

ないで、人々が寢靜つた後もいろ／＼と考へた。かういふ時にこそ人は本當に落着かなければならないと思つて、一心に自分の考へを書きしるして行つた。一齋の書いたたくさんさんの著書の中でも、「言志録」といふ書物は、後世いつまでも残る立派なもので、殊に青年は必ず讀まなければならぬものとされてゐる。維新かいたんの三傑けつの一人である西郷隆盛は、この本を最も愛讀し、その中から百一のことばを取り出して部屋にかゝげ、日夜心を磨いたといはれてゐる。この外幕末・維新以來の名士で、この書の感化を受けた人はたくさんある。一齋に直接教を受けた門人からは、渡邊華山のやうな偉い人を出したしその書物は、西郷隆盛などの偉人に大きな感化をあたへた。地下の一齋も定めて満足したことであらう。

一齋はある時人に教へて次のやうなことを言つた。

「志のある者はよく切れる刀のやうなもので、どんな悪い者でも逃げてしまふが、志のない者は切れない刀と同じで、子供までこれを馬鹿にする。人はすべからず志が大きくなければならない。そしてそれを果すには、常に用心深く工夫努力しなければならぬ。」

十九歳で天下第一の人物にならうと志を立てた一齋は、よくその目的を達して十分に國家に御奉公し、安政六年、靜かにその一生を終つたのである。

大正四年十一月十日、大正天皇は一齋の大きな功績を思召されて、特に從四位を贈りたまうた。地下に眠る一齋の光榮これに過ぎたるものはないであらう。

海警豫備せざるべからず。然れども環海の廣き其れ以て盡く防禦を爲すべけんや。

民心を團結して以て金城湯池と爲すに若くは莫し。沿海皆能く是の如くんば外寇虞れと爲すに足らず。

海防の任に膺る者は民の和を以て先と爲す。器械之に次ぐ。

一言志録一

六 飯沼 慾 齋

天明二年六月十日、伊勢國龜山の豪農西村家に生まれた。幼名を本平(後に專吾と改む)といひ長じて大垣の人飯沼長顯の家をつぎ、それより飯沼氏を稱した。

生まれつき賢くて學問を好み、十六歳の時より次ぎ／＼有名な學者について植物學や、オランダの醫學を學んだ。勉學は年と共に進み、その研究ぶりは極めて熱心であつたが、なかんづくスエーデンの博物學者リンネウスの植物分類法にしたがつて、「草木圖説」三十卷を著したことは最も大きな業績である。時に慾齋七十四歳であつた。

慶應四年閏五月五日八十四歳で歿した。明治三十二年、有志相はかつてその碑を大垣公園に建て、慾齋の功績を顯彰し、又、明治四十二年、皇太子殿下大垣行啓の際には、特志をもつて從四位を贈らせられ、その功を賞し給うた。

一)

ある年の秋のことであつた。見渡すかぎり廣々とした田の面には、重くみのつた稲穂が一面に頭をたれて、刈り入れの日も間近にせまつてゐる。夕日が西山に落ちようとし

て、山際をあかねに染め出し、静かな夕暮の空気が身にしみるやうに澄みきつてゐた。本平は乳母に負はれて、田圃道の家路を何か話しながら急いでゐた。

「ばあや、都に出て學問をすることを、今夜はきつとおとうさまに頼んでおくれよ。」

七才にしては大人びた程の賢い顔立の本平は、先程から幾度となくこのことを乳母にくりかへして頼んでゐるのである。

乳母は四五日前にも、本平から都に出て學問をしたいといふ望みを聞かされた。その時は、

「まあ、こんでもない。」

と笑つて相手にしなかつたのであつたか、度重なる本平の熱心に動かされて、今日といふ今日は、このけなげな志を遂げさせてやりたいと思つた。



飯 沼 慈 齋

「まあ殊勝なこと。今夜はきつとおとうさまに頼み上げて上げますよ。」

まだ母親の懐こひしい七つの頃に、早くも都へ出て學問をしたいといふ望をいただくとは、何といふ分別のついた賢い子であらう。乳母はひそかに驚きながらも、未頼もしく思つて、背負つてゐる本平をいとしげに揺り上げた。

その夜、乳母は主人夫妻に、本平の望みをうちあけて、その望みを達してもらひたいことを歎願した。しかし、主人夫妻はそれを一笑に附して相手にしなかつた。

「年端もいかない本平が、そんな望みをもつはづはないではないか。たとへそんなことを言つたとしても、それはあの子のとりとめない夢だ。お前は本平にからかはれてゐるのだよ。」

本平の父母からかう云はれて、乳母はさすが引き下るより外はなかつた。

しかし、その位のことでは本平の堅い志はくじけなかつた。彼の向學心は年と共につり、將來へのあこがれはいよいよ大きくなつていつた。

「どうかして學問をして、立派な學者になりたい。男と生まれて、一生田舎で朽ち果てるのは、いかにも残念だ。」

かういふ心持が本平の心中をいつも往き來して、はては本平自ら上京遊學のことを、兩親にくりかへし願ふのであつた。父母は本平の年に似合はぬ殊勝しゆしやうな心がけを、ひそかに喜んだ、けれども帝都遊學のことだけは、餘りにも幼なすぎるといふ理由から、決して許さうとはしなかつた。

本平にとつて、やる瀬ない年月が長い間つづいた。さうして、學問に對するあこがれは、ますます強くなり、どうしてもそのまゝじつとして居れらなくなつた。

「大垣の叔父さんの所へ行かう。叔父さんはきつと私の志をきいてくれるにちがひない。」

その日、ひそかに仕度をととのへて、大垣へ向かつて旅立つた。無斷家出の罪は、他日成功の曉あかつきに重々おわびするつもり。本平は時に十一才の少年であつた。

本平の家出を知つた父母は、さすがに驚いた。けれども、本平の志をたわいもない少年の夢と思ひこんでゐたから、道中何かにこまりきつて、やがては家に歸つてくるものと考へた。

「なあに、五里先の渡し場まで行つた頃には、そろそろ目がさめて引きかへしてくる

さ。」

父はそんなことを云つて、試こころみに下男に云ひつけて、後を追はせてみた。

しかし、本平は渡船場へ行つても、そこから引きかへさうとはしなかつた。悠々渡りきつて、やがて長途大垣へ着いた。大垣には叔父飯沼長意がゐたのである。

何の前ぶれもなく、單身訪れた本平を見て、叔父は驚いた。やがてその志を始終聞いて、更に驚嘆たんたんした。そして本平の希望に對して、温い愛情と理解をもつてくれた。ならうことなら、この子を良い師につかへさせて、その志を十分に達しさせてやりたいと思つた。

それにしても、本平が母の許を得ないで、家を出て來たことだけは如何にも許し難かつた。

「よしよし。お前の志は必ず達しさせてやる。だが、兩親に無斷むだんで家を出て來たことはよろしくない。わしがよいやうに取計とりはかりつてやるから、一度家へ歸つて、出直して來よう。」

言はれて本平は引きかへして行つた。その頃には、兩親にも本平の堅い志がわかりか

けてゐた。それに叔父長意の情あるとりなしによつて、遂に父母から念願達成のことを快く許された。さうして、明くる年、本平は希望に胸おどらせながら、再び叔父長意を訪れたのである。

叔父は本平を引きとつて、これを飯沼長顯のもとへ預けた。長顯は當時大垣藩の名医として、學識高く、廣くその名を知られた人であつた。

かくて有爲の少年本平は、長顯を師として日夜勉學にいそしんだ。年來の希望こゝに達し、親しく良師について學を修めることの幸福を思つて、ただ一心につとめはげんだ。その勉學の態度の如何に熱烈なものであつたかは、想像に餘りがある。

これが飯沼慾齋の、少年の日の姿であつた。

(二)

慾齋はもう年が五十才にもなつて、醫家として立派に一家を成してゐた頃のことである。

ふりかへつてみると、十八才の時京都へ上り、朝醫福井丹波守の門に入つて醫學を修

め、二十八才の時には、更に江戸へ行つて、藤井芳亭ほうていについてオランダ醫學を學んだ。又、別に本草學を小野蘭山について數年間も勉強し、進んで水谷豊文について一層深く研究した慾齋であつた。

學成り、大垣の地に醫業を開いてゐたが、彼の名聲は高くなるばかりで、來つて治療を請ふものが、日々門に満ち満ちてゐた。又、その學識をしたつて、わざわざ門をたゝいて教へを請ふ者も、遠近の各地から數多くあつた。

かうして慾齋は醫者としても、學者としても、立派に成功してゐたのであつたが、しかし、この位のことでは満足してしまふやうなことはなかつた。

彼は、當時世人に餘りかへりみられなかつた「植物學」の研究に従つてみたいと思つた。五十の齡よはひに達した慾齋であつたが、餘世をこの方面の研究に委たねて、精魂をかたむけたいと思ふ希望こそは、曾つて少年の頃描いたあこがれと同じやうに、若々しくてたくましいものであつた。

けれども忙しい醫業に従つてゐては、勉強も思ふままにできなかつた。彼は病家に往診しんするときにも、必ず書物を駕籠かごに入れて、これに眼を注ぎてゐた。寸陰を惜しんで讀

書、研究にいそしむのが彼の常であつたけれども、家業のために少なからず研究の時間をうばひ取られるのは、如何ともすることができなかつた。

どうかして専心植物學の研究に没頭したいと思つた。

遂に愆齋は、家を義弟健介にゆづることにした。そして自分は城西長松村に別莊を建て、そこに移り住んだ。別莊は愆齋の好みによつて簡素に建てられ、平林莊と名づけられた。

平林莊に移つてからは、何物にも妨げられない讀書三昧の生活がつゞいた。彼は一切來客と會ふことも避けた。そして心ゆくまで植物學の研究に精進することにとめた。

當時、植物學の新らしい書物は、僅かに大垣生れの宇田川榕庵といふ人の「植物啓原」、今一つは伊藤圭助といふ人の「泰西本草名疏」二卷である。しかし、それはどちらも西洋の書物を翻譯したものであつて、特に我が國の植物について研究したものではなかつた。それ程に當時この方面の研究は進んでゐなかつたのである。

愆齋にはこのことが不満に思へてならなかつた。何とかして自分の手で、我が國土に産する草木の圖説を作つてみたいと思つた。

植物學がどんな學問であるか、といふことさへ分らない今の世の人々には、自分のこの研究などは、きつと捨ててかへりみられないことであらう。しかし、將來植物學の研究が盛んに行はれる時代が到來した時には、自分の研究が、學界に貢獻する所必ずあるにちがひないと堅く信じた。

愆齋は草木圖説を完成するには、自分はまだ學問が十分でないといふことも考へた。未開拓の學問に手をつけることの困難さも思ひやつてみた。だが、たとへ十でも百でも、草木の圖説をつくることができれば、それで尊い業績ではないか。誓つてこの大業に餘生を捧げんものと、奮然筆をとつて、尊い第一歩をふみ出したのであつた。

さて、老齡の愆齋は若者も及ばない熱心さと、獨創的な方法によつて、研究を進めた。彼は植物學の研究には、「圖」と「説明」と兩者が備はらなければ、全きものではないと考へて、この兩者を併記することにした。これは、當時最も權威のあつたリンネウスの書物より、一步進んだ行き方であつた。リンネウスの書物には、植物の「説明」だけで「圖」はなかつた。まして、草木の漢名だけを知るに止まつた當時の本草學とは、くらべものにならない程進んだものであつた。

「圖」は實物大に寫すことを本体としたが、實物大には寫し得ない大きな植物は、これを縮少して寫しとつた。又、肉眼ではどうしても見分けられない微細なるものは、顯微鏡をもつて擴大する方法をとつた。そして、縮小、擴大の場合には、必ずその度数を圖の一條毎に明記していつた。

「圖」の寫生には少なからず苦心した。しかし、これを畫工に描かせたのでは、唯だ見た目を美しくするだけで、その實體を寫すことから遠ざかつてしまふ。これでは學問の研究にはならないので、慾齋は獨力で實體を摸寫することにとめたのである。

それにしても、當時我が國には、顯微鏡といふものはまだなかつたのである。たとへこれを手に入れようと思つても、鎖國時代の我が國では、絶対にどうすることも出来なかつたはずである。

それでは慾齋は、どうして顯微鏡を手に入れたのだらうか。

彼は微細な植物の研究に、顯微鏡の必要を痛切に感じた。顯微鏡は、研究の最大の武器である。これあつてこそ、新しい學問の開拓ができるのであるのに、残念ながらそれがどうしても手に入らない。

「やうだ、ひとつ自分で工夫して作つてみよう。」

六十にもならうとする慾齋の胸の中に、また新たな意欲が湧き起つたのである。

先づ彼は蘭書によつて、顯微鏡の構造を精細に研究した。若き頃の蘭學の研究が役立つたのである。そして早速名古屋から職人を呼びよせて、その構造を説明しながら、作らせてみたのである。勿論、複雑微妙な顯微鏡が、なれない職人を相手に、一度や二度で成功するはずもない。工夫に工夫を重ね、研究に研究を加へて、遂に精巧なものを製作することに成功したのである。

慾齋の旺盛な研究心は、こゝにも遺憾なく發揮されて、當時誰も試みなかつた驚くべき製作を完成したのである。それにしても、目ざす顯微鏡が出来上つたときの、慾齋のよろこびはいかばかりであつたであらう。

自分の手で作つた顯微鏡下に擴大された植物の生態を見ながら、慾齋は歡喜にひたつて研究をすすめた。未だ自分の採集してゐない珍しい木や草のあることを聞くと、どんなけはしい山でも、深い谷でも、少しも厭はず採集に出かけても行つた。かくて採集された草木は、彼のたゆみなき努力によつて、悉く分類され圖記されて行つた。

愍齋のかうした研究生活は、爾來三十年間もつづけられた。壯者をしのぐ研究心は、年と共にいよいよ盛んになり、六十才を越える頃は、意氣極めて旺盛で、研究のために寢食を忘れることが、しばしばであつたといふ。

かくて「草木圖説」三十卷の偉業を、遂に大成したのである。

五十才にして志を立て、七十餘才にしてこの大研究を完成した愍齋の功績には、誰も頭が下るのであるが、それにしても、歳を忘れ、寢食を忘れて遂に研究を大成した愍齋の喜びも亦どんなに大きかつたであらう。

「自分の著述は、今の世の人を相手にしたものではない。將來植物學の研究が必ず起つてくる。その時に期待をかけてゐるのだ。」と云つた愍齋の卓見は、見事に的中した。彼が草木圖説の完成に没頭した當時は、我が國には低級な本草學が行はれてゐたにすぎなかつたが、愍齋の死後十餘年で植物學の研究が大いに興り、彼の草木圖説は、世人の植物學研究に、なくてはならない貴重なものになつたのである。

草木圖説は、我が國において學問的に草木を分類記述した最初のものである。それが如何に科學的に精密なものであるかは、愍齋世を去つて七十年後の今日にあつても、尙

世界の植物學者の間に尊重せられてゐる一事で、十分に知ることができるのである。

愍齋が草木圖説前編の稿を書き上げたのは、嘉永五年であつた。この年の六月、たまたま大垣の俵町に出火して、彼の邸宅も類焼の災難にあつた。この時彼は相憎く本宅にゐて常の如く研究をつづけてゐたので、焼け出されのうき目を見た。焼跡のそこここにはまだ餘燼が散亂し、後片附けの人夫たちによつて混雜してゐた。

かうした混雜の中にも、唯一人平常の落着きを失はないのが愍齋であつた。火事場に騒ぐ人々が、ふと氣がついて愍齋を見たとき、彼はもう焼跡の一隅に手頃の臺をすえ、頬かむり姿でそれに倚つてゐた。傍には研究用の蘭を二鉢おいて火事のことなどいつかに忘れてしまつたもののやうに、熱心にそれを研究してゐたといふ。

世俗を遠ざかり、利慾の念を去つて、ひたすら研究に没頭した愍齋は、大火事の騒ぎにも亦心をみだすことがなかつた。徹頭徹尾植物學の研究に打ちこんだ彼の心境こそは清らかな水のやうに澄みきつて靜かなものであつたのであらう。

(三)

愍齋の晩年、それは醫者としても學者としても、名聲一世にかくれもなき一家を成し

てゐた。

やがてその名は幕府に聞えた。幕府は愍齋を採用する内命を下した。たまたま長崎から蘭醫シーボルトが、幕命によつて江戸へ來るとの報が傳はつた。愍齋はかねてからその名聲を聞いてゐたので、シーボルトが江戸へ來るなら、自分も江戸へ出たいと思つた。そして彼について更に一層醫學を研究しようとする若い希望に燃えた。

彼は直ちに幕府の内命を奉じようとした。ところが弟子達は愍齋の出仕に反對した。師の老齡を思ひやつて、今更役所づとめの苦勞をなめさせたくないとの、美はしい師弟愛から出たものであらう。一同は極力愍齋の出仕のことを引き止めた。

愍齋は、門人達の真心にうたれて、幕府に従ふことを思ひ止まつた。これが爲に名醫シーボルトに師事して、醫學の新知识を學ぶ機會は再び來なかつた。しかしシーボルトから贈られた珍しい數種の植物が庭園に植えられて彼の朝夕を慰めた。

それからは愍齋は、一段と靜かな心で、植物學の研究に精進した。ただひたすらに學問の道に身命を捧げつくした。

かくて八十四才。その輝かしい一生の終りを告げた。

思へば愍齋は幼少の頃、早くも大志を抱いて、日夜それに胸をどどろかせてゐた。それは父母さへも笑つて相手にしなかつた程、無謀に思へる大きな夢でもあつた。

しかし彼はたゆまぬ刻苦精勵によつて、遺憾なくそれを實現した。果して世人を驚嘆させる學界の大研究を大成したのであつた。

「少年よ、大志を抱け。」

偉大なる郷土人飯沼愍齋は、我々にさう叫びかけてゐるやうにも思へる。

我が郷土の愛する少年達よ。すべからく大志を抱かうではないか。たとへそれが夢にも似た願望であらうと、愍齋に劣らぬ刻苦精勵をもつてすれば、必ず實を結ぶ日の到來することを信じてよい。

幼い愍齋が、乳母の背中で描いた夢が着々事實となつて現はれて、その功績は今なほさん然と光り輝いてゐるではないか。

七 村瀬藤城

幕末文化文政の頃は我が美濃飛騨地方に於ても、學藝が次第に普く行きわたり、立派な學者や詩人が城下町ばかりでなく、代官所や旗本陣屋の所在地にまで出るようになった。

村瀬藤城は名古屋藩代官所のあつた武儀郡上有知に生れた。上有知は今の美濃町である。通稱平次郎、名は斐、字は士錦、藤城といふのはその號である。

禪應寺の禪智和尚から教へを受けた。二十一才の春、大阪へ行つて有名な頼山陽の弟子になつた。それから三年目、師の山陽が上有知の藤城の家を尋ね暫くここに留つて居たことがあつたが、その間に藤城は先生を近くの景色のよい所、めづらしい所などへ案内したり、或は先生に教へを受けた、禪智和尚の所へもおともをしたりして、共に詩や歌などを作つた。その間に藤城の學問は非

美濃飛騨の偉人
不修之流
山陽外史

山陽外史
忽ち得たり賀州の山。
識らず北行深きこゝ幾里なるを。林端
峰の間。落日頭を回らせば不破の關。
奚囊(詩や歌を入れる袋)勝を探る百

遠上郡城澗壑間。松屋楓逕
幾灣々。棧欄數曲人堪倚。斜
照眼明看白山。

藤城和唱

遠く郡城に上る澗壑(谷や山)の間。松屋
楓溪(松のかけ紅葉の小道)幾灣々。棧欄
(がけのらんかん)數曲人倚るに堪へたり。
斜照(夕日)眼明に白山を看る。

常に進歩した。山陽は藤城が學問も深く、又愛郷愛國の志の厚いのを知つて彼を愛した。あの有名な日本外史の著述に當つては、陰に陽に藤城が手助けをしてゐるといはれてゐる。藤城は又佐藤一齋や梁川星巖などの學者とも交つて種々教へを受けた。

文政八年、三十五才の時、藤城山の麓に私塾を開き、梅三千本を植へ、その名を梅花村舎といつた。彼の名聲を慕つてたちまち數百人の門人が出來た、郡上や犬山の藩中の人々にも時々出かけて行つて親切丁寧に教へたので、その評判は非常に高くなつた。

藤城はたゞ學問が優れてゐたばかりでなく、又上有知外五十三ヶ村の總庄屋をつとめてゐた。天保六年曾代用水の争議の解決に盡力した。又嘉永三年八月此の地方に大洪水があつて、至る所非常な慘害を受けたことがあつたが、その時など全く寢食を忘れて村々の人達を救助した。嘉永六年秋歿、享年六十三。

思ふに當時の學者の多くが祿をむさほり、名を望んで出世をすることばかり考へてゐたのに、ひとり藤城は學問を愛し、郷土の青少年の爲に人たるの道を傳へ、教を説き、又村の人々のために力を盡したのである。藤城の如きは、眞に郷土を愛し、國を思ふ學者であつて、その功績はまことに不滅と申すべきであらう。昭和三年十一月十日、贈從五位の恩命を受けられた。

× × ×

嘉永三年も暮れんとする十二月二十日、木枯吹荒ぶ黄昏時、武儀郡上有知の町、藤城山の麓、梅花村舎の玄關へ、

「先生、先生、たた大變だ、大變だ。」

とあはただしく駆けこんで来た一人の男があつた。見ればそれは、馬車挽の良太である。つゞいて又二人、三人、

「先生、先生、大變だ、大變だ」

と口々に叫びながら、息せききつて風のやうに飛びこんで来た。色は青ざめ目は血走りねち鉢巻、縄だすき、手に手に棍棒をにぎつてゐる。

物音に驚いて奥からかけ出て来たのは藤城門下四天王の一人三宅樞臺である。

「おゝ、先生、大先生は」

「大先生に……」

「早く、早く。」

「いや、先生は奥においでだが、一体皆さん何事が起つたのですか。」

「何事も彼事もあつたもんじやない。とてもどえらい騒動で。」

「どえらい騒動。その大騒動といふのは一体何ですか。」

「今、牧谷の人等が隊を組んで此の町へ押寄せて来るんです。それに川沿ひの村々の者達までも加はつて、その數凡そ八百人。今、天神の森に勢揃ひをしてゐるところです。竹槍、箆旗、とても物すごい勢でございます。これを知つた村中は、上を下への大騒動なんです。」

「早く、先生に取りついで下さい。早く早く。」

「早く先生に會はして下さい。」

「ムーさうか。しかとそれに相違御座らぬな。」

「ほんとうだとも、良太がちやんと此の目で見て來てゐるんです。」

「さうですか。では少々お待ちなさい。」
と云ひすて、三宅は奥へかけこんだ。

x x x

三宅から一部始終を聴き終つて、

「ううん、さうか……」

机の前に端坐した藤城はもう六十に手がとどきさうに見えるが、太い眉、人を射るやうなまなざし、ぐつと一文字に結んだ口もと、どう見てもたゞの老學者ではない。

床には藤城の手で美しく書かれた頼山陽の七言絶句の詩がかかつてゐる。その前には今を盛りと咲きにはふ眞白な山茶花が生けられてゐる。

やゝあつて靜かに目を開いた藤城は、

「そんなことにならねばと、過ぐる八月の大洪水以來村々の庄屋達とも相計り、再三再四お上へ救助方をお願いし、一方村人達の心をなだめる爲にあらん限りの力をつくして來たのであつたが……それももう水の泡か……。然し、今はさやうな繰り言を申し

てゐる時ではない。後で策は講ずるとしても急ぎ天神の森へかけつけて、かなはぬまでも牧谷の人々に物の道理を説ききかせ、何んとしても一先づ彼等を村々へ引取らせねばならぬ。今の場合、總庄屋村瀬平次郎のとるべき道は此の一途あるのみだ……さうだ。」

と決心した。身づくろひもそこそこに靜かに立ち上る。小鬢の銀髪が窓ごしの夕陽にきらりと光つた。

「でも先生、彼等はうえきつた暴徒たちです。如何に先生が御説得になつてもとても馬の耳に念佛で何の役にも立ちますまい。それに先方は第一殺氣だつて居ります。そんな中へおいでになつてはどんな事が起るかも知れません。まことに險呑けん呑なことをございます。こりやお出向になることはどうあつてもお止りになる方が得策かと存じます。」

「いや、三宅、わたしの身をきづかつて止めて呉れるお前の言葉はまことにうれしいが今のわたしは一身の安危などを考へてゐることは出来ない。わたしは上有知代官所村の總庄屋である。更に又わたしは多くの人達に人の道を説ききかせてゐる身であ

る。どんな事情があるにもせよ、村人達が隊を組んで他の家を襲ふやうな亂暴を敢へてするのをこのままじつとして見てゐることが出来やうか。今の場合命を惜しんで手をこまねいてゐることは道を説く者の大恥辱だ。私は思ふ。今こそ道を説く者が道に殉ずる時であると。何、至誠神に通ず、誠を持つて話せば彼等とても人の子である。わからぬ事はよもやあるまい。まことをもつて動かせぬものは未だかつてないと私は信じてゐる。我が恩師頼山陽先生も常に此の氣魄と意氣を此の上もない大切なものとして尊ばれた。さればこそ、あの御病身でありながら日本外史の大著述は完成されたのだ。今わたしが身をもつて彼等に道を説くことは、一つはもつて恩師山陽先生の御高恩の萬分の一にも報ゆることになると思ふ。

更に思へば、前々から申してゐる通り、今我が國は非常な時局に立ち到つてゐる。異國との關係が面倒にならうとしてゐる。兄弟垣にせめいでゐる時ではない。上下一致事に當り、上御一人の大御心を安んじ奉り、外はもつてかりそめにも異國のあなごりを受けるが如き行動をすべき時ではない。」

「いや、先生よくわかりました。私もお供仕りませう。」

三宅のことばは全く感激の爲にうちふるへてゐた。二人は靜に部屋を立ち出た。待ちかねてゐた村人達は、

「わあつ、先生!! 大先生!!」

と、かけよつて來た。藤城は靜かに、

「いや、皆さん事情はすつかり三宅からさきました。わたしは、これから天神の森へ出かけます。」

「エツ、そりやいけません。大先生、それや死に行くやうなものです。」

「我々はどうしてあの人等をくひ止めやうか、それをお尋ねに上つたまでです。」

「そうだとも。わたし達は先生にお指圖をうけに來たんです。大先生に先方へ……」

「いや、皆さんの御心配下さること、まことに平次郎かたじけないが、私には又私の考へがありますからな。行かしてもらひませう。」

と低い聲ではあるが、りんとして言ひ放つた。藤城はもう草履をはいてゐた。

「案内を頼みますぞ。」

一行は連れだつて梅花村舎を後にして、梅の間をくぐりぬけてだら／＼坂を下つて行つ

た。日は全く西山に没して遠くの山寺で打ち出す入相の鐘が氣味悪くゴーンゴーンとなり渡つた。折から木枯は雪さへふくんでビュウ／＼と吹きつけ出した。

x x x

天神の森では今勢揃ひが終つたものかワアワアとときの聲をあげて、手に手に、さす又、棍棒、竹槍などを打ちふり打ちふり、筵旗を先頭に町の中さして繰り出さうとしてゐる。かけつけた藤城達の一行は、

「待て。」

「待て、話すことがある。」

「待て、村瀬平次郎だ。」

と叫びながら両手をひろげて一同の前に立ちふさがつた。

「わあつ、村瀬の大先生だ。」

「藤城先生だ。」

「總庄屋だ。」

と口々にひしめきあつたが、すぐ道を開いた。一行は拜殿の前に進んだ。村人達もその後につゞいてぞろ／＼と拜殿の前に集つた。拜殿のきざしに登つた藤城の顔がもえさかつた松明の光にあかく照らし出された。藤城を取圍んだ村人達の眼は食にうえた狼の如くざら／＼光つて物すごい。

一同は無言である。やがて中の一人が口を切つた。

「先生。私達を止めて一体どうしようとなさるんですか。正月が来ると云ふのに俺達にはもう一粒の米だつてなくなつたんですぞ……いくらどうだつて此の寒空に、さう木の實や草の根ばかりかじつてゐられますかい。」

「さうじゃ」「さうじゃ……」

わあつと又ひしめき出した。

「いや、皆さん、皆さんの言はれること、平次郎にはよつくわかります。わかればこそ此の秋の大洪水以來、近在の村々へも又お上へも色々救助方をお願いして来たのです。皆さんの御期待にはそはなかつたかも知れぬが、兎に角今日まで皆さんが生きて來られたのは近在の人々のおかげですぞ。それなのに、いかに餓ゑたればとて他人の

家を襲つて物を取らうなどと云ふことはまことに淺ましいことで、人間のすべき道ではありませんぞ。『渴しても盗泉の水は飲まず。』と昔の聖人も教へてゐます……それに今は……』

「エイ、先生、今のわつし等にはそんなお題目は馬の耳に念佛ですわい。」

「さうだ、青表紙の講釋では腹がふくれませんぞ。」

「さうだ、いけく。」

「さうだ、さうだ。」

一同はわあつと雪崩をうつてかけ出さうとした。

「待て、待つて下さい。どうかしばらく心を靜にして平次郎の一生のお願い、しばらく聽いて下さい。長くは云はん。暫くだ。」

しばらくの言ひはなつた藤城の言葉は、たけり立つた一同の腸の中へもしみ渡つた。藤城の眼は火の如くかがやいてゐる。

「皆さん、今我が日本の本國は如何なる時に立到つてゐるか御承知か。我が國にとつて最も心配なことは異國との關係です。オロシヤの國は北の方から我が國に攻めこも

うとしてゐます。アメリカ、イギリスなどと云ふ國々も我が國に迫つて國を開かせやうとしてゐるとか、若しきゝ入れられない場合はどんな無理な戰爭をしかけるかも知れませんぞ。聞くところによると、異國の武器はとて進んだすばらしいものがあるぞか、だが日本は神國です。國民が一致團結さへしてゐれば、異國何おそれんやであるが、今の國情ではまことに心もどない。皆さん、今、日本の人々は小さなことの爲に争つてゐる時ではありませんぞ。國民が天朝様を中心にして如何なる苦しみにもちかち、火の玉の決意をもつて事にあたり、かりそめにも異國の人々にあなどりをうけたり、つけ入られる様な隙をつくつてはならぬ時ですぞ。皆さん、いかにひもじい思ひをすればとて、血を流すやうな兄弟喧嘩などすべき時ではありませんぞ。」

國を思ふ赤心よりほこばしり出る平次郎の言葉は一言一言火をはく様であつた。たけりたつた村人達にも藤城の一語一語がはつきりと肝に銘じていくらしい。更に言葉をついだ藤城は、

「然し皆さん、村瀬平次郎も總庄屋です。皆さんのこの苦しみをこのまゝ見殺しにするやうなことは刀にかけても致しません。神明に誓つて皆さんのお力になりませう。」

じやによつて、どうか此の様な亂暴だけは断じてお止め下さい。幸ひ、わたしの家には昨日納まつた年貢米二十五俵とその外に麥粟合せて五六俵はあります。それを全部皆さんに差上げませう。明朝早速戸數に應じて皆さんの村々へお配り致します。二階から目薬とお笑ひになるかも知れぬが平次郎の志、どうか一時をおしのぎ下さい。その余のことは他の庄屋ごのとも御協議致し、代官様へも篤とお願ひしてお倉米のおさげはらひをお願ひするつもり。

皆さん私の申すことがおわかりになつたなら、どうか此のまゝお引取り願ひ度い。私一生のお願ひはこのことです。平次郎の申分がおわかりなく、どうしても今の皆さん方のお考へをやりぬかうとされるならば、首途の血祭、總庄屋平次郎のこの白髪首をはねてから出かけてもらひませう。」と涙とともに説諭した。

さすがの群集も血もあり涙もある藤城の言葉には反抗するすべもなく、一人去り二人去りして、始め集つた農民達も遂に皆退場してしまつた。

天神の森には藤城の一行五名だけが残つた。一行をうながして藤城は森を出た。降つ

てゐた雪もすつかり止んで、晴れ渡つた大空には二十日の月がかゝつてにぶい光をなげかけてゐる。静まりかへつた町の家々がうす化粧をした藤城山を背景にして墨繪のやうにくつきりと浮いてゐる。

急ぎ家に歸つた藤城は町人達にこの次第をつげると共に、良太に命じて倉庫から米麥、粟などを荷馬車に積ませて夜の明けきらぬうちに牧谷地方さして出發させた。

更に藤城は五十三ヶ村の庄屋を呼び集め、色々協議した結果、代表者數名と共に代官を役宅に訪れて此度の有様をこまかに話し、お倉米の拂下げ方を懇願した。役人達も藤城等の熱心に動かされて遂にその要求をいれ、お倉米五百俵を出して百姓達の窮狀をすくふことにした。

x x x

翌々二十二日の明け方、朝霧の立ちこめた木曾川を、ギイ／＼と櫓音もゆるく靜に下つて行く一艘の小舟があつた。

「先生、少し横におなりになつたら如何でございますか。もう三日もろく／＼お休み

にならんでありませんか。」

といつてゐるのは弟子の縦台である。

「いや大丈夫だ。これが御奉公の一分だと思へばなんでもない。それよりお前こそちつとも休んでゐないじやないか。少し休んだらどうだ。」

といつてゐるのは旅姿の藤城である。

「いえ、私はまだ年も若うございますから、先生こそ。」

「三宅、でもわたしはうれしい。九月以來あれ程願つても聴き入れられなかつたお倉米のさげ渡しのことも、とう／＼昨夜はきくとゞけられ、五百俵ではあるが今日牧谷外五ヶ村の村々へ配られることになつた。五百俵あれば村人達はしばらくは息がつげると云ふもの。その上、明春早々に關東からお奉行衆がおいでになつて、流された堤防田畑の復舊工事の計畫を立てて、指圖さしずをされるとに相成つた。」

「さやうでございますか。これも皆先生の眞心が天に通じたからでございます。」

「去年の水害は、村の年寄達も知らぬと云ふ程大きなものであつたが、なかに、五十三ヶ村の村人が一つ心になつて仕事をすれば、わたしの見積りでは三月の後には立派に

もと通りの田畑になると思ふ。さすれば五月の植付けには充分間に合ふから風さへ吹かければ來年の秋は村々の田んぼは黄金の波だ。あゝ、私は來年の秋祭りが待ち遠しい。晴れ渡つた青空になりひゞく太鼓の音がなつかしい。」

「村の若い衆連の奉納する獅子舞も私には待たれてなりません……おゝ先生、ごらんなさいませ、もう太陽おひさまが上り始めました。」

「ウーム、氣持のよい朝だのう。この八月以來一度もこんなはれ／＼とした氣分になつたことはなかつたわい。」

師弟の顔は折柄昇る朝日の光をうけてよろこびかゞやいた。と、川ばたの岩の上に黄色い腹を見せて靜に尾をふつてゐた一羽のせきれいが櫓音うしなに驚いたものか、ビビツと一聲鳴いてゐるせいよく舟の前をよこぎつた。

舟は靜に下つて行く。

それから伊勢海に出て桑名についた藤城達は、暮の町をかけ廻つて昆布、ひじきなどの海草類、いわし、かすの子、たつくりなどの正月魚を澤山買ひ集め、數艘かずそうの舟に満載して郷里上有知村へ歸つた。これを代官から送られた餅米と一しよに村中へもれなく分

配した。

x x x

大空は眞青に晴れ渡つてゐる。

飛驒の連峰はまだ眞白に雪をいただいて吹く風はつめたいが、小川の水はサラ／＼と音を立てて流れ出した。川ばたのせりの色も一きは青味が目立つて来た。枯草の間から露の臺が二つ三つもえ出てゐる。

折柄畑の間を通つてこちらへ來かかつたのは藤城と其の弟子樞台である。ふと畑の隅にある一本の白梅に目をとめた樞台は、先なる藤城を呼びとめた。

「先生!! ごらんなさいませ、梅の蕾がもうこんなにくらんで來ました。あつ、こゝにはもう一輪咲いてゐます。」

「なる程なう。おゝ、よい匂ひだ。正月早々復舊工事の監督どもと此の村へ來てからもう二ヶ月。余りの多忙さに春のおとすれさへも忘れてゐた……うちのまはりの白梅ももうみごとに蕾をつけてゐることであらう。」

と感慨深さうに藤城はつぶやいた。

「さやうでございます。梅花村舎は陽當りもよろしうございますし、三千本もあるのですから中にはもうすつかり開いてしまつた木もあることでございます。——如何でございます。一度家へお歸りになりましたは……。」

と三宅は目をしばたいて藤城の顔を見た。

「いや、わたしもかうして梅を見てゐると、白梅が思ひ出されて急に歸りたくなつて來るが、然し此の工事が片づくまでは斷じて家へ歸るまい。もう後一月だ。それまで藤城は斷じて家へ歸らぬ。」

老先生の決心は堅かつた。牧谷川の堤防からは今日も亦

「よいいやなあ、あゝりやありやあこれはいせ」

と木やり音頭の節に合わせて、よいしょくと地づきをするにぎやかな村人達の聲がきこえて來る。

「三宅、行かう。」

と弟子をうながした藤城は、梅のものをはなれて枯草をふんで堤防の方へと歩き出した。

八 坪井 信道

坪井信道は寛政七年今の揖斐郡脛永はすながに生まれた。十歳の時に父を失ひ、十二歳の時に母を失つた。後、兄淨界じやうかいに伴はれて江戸に出て、醫學を修業した。後九州を遊歴し、名醫を訪ねて疑をただした。その際示された西洋醫書に感じてオランダ醫學の研究に志し、江戸に出で榕齋しんさいの父宇田川榛齋しんさいの門に入り、幾多の苦難に耐へて大成した。幼名は道、信道は字で誠軒と號した。後に長州侯の侍醫じとなり、又多くの門人たちを導いた。

その頃の人は、信道と伊東玄朴・戸塚靜海とを、三大西洋醫家と稱した。嘉永元年十一月八日歿年五十四、門弟數百人、就中名を得たものはその子信友、養子信良、緒方洪菴、川本幸民、青木周弼、廣瀬元恭、黒川良安などである。

(一)

稀まにみる大雨の日である。うすすみ色の梅雨空つゆぞらから、ごうごうと大地へたたきつけるやうに降りつづいてゐる。風も強く吹き出した。この豪雨ごううのために、峠道とうみちは人通りが絶

えた。辻の榎えのきの大木がものすごくゆれて、道も山も水煙にかすんで、峠は今、恐ろしいばかりに大雨に荒らされてゐる。

この吹きぶりの峠道に、ぼつとり降つて湧いたやうに小さな人影が一つ、吹きつける豪雨の中を、よろよろよろけながら、急ぎ足に坂道を上つていく。見れば意外にもまだ年端としはもいかぬ少年の姿である。

少年のからだは、全身すぶぬれで、亂れた髪の間から見える顔には、ほとんど血の色が見えない。唇くちびるを堅くむすんで、眼を異様にかがやかせながら、じつと前方水煙かみなの彼方を見すえたまま、あへぎあへぎ道をのぼつてゐる。

少年の名は道（後の信道）、年は僅かに十二才。この物すごい大雨に、何事があつてこの少年をけはしい坂にかり立てたのであらうか。

榎を過ぎると間もなく峠は下りになる。信道はその木影にほつと立止つて一息ついたが、したたり落ちる顔のしづくを拂はうともしないで、再び驅けるやうに峠を下つて行つた。

下りきつた所に小さな祠ほこらがある。そこまでたどり着いた信道は、崩れるやうに祠の前

にひざまづいて、しばらくは身動きもしなかつた。荒れ狂ふ風雨の中を、二里の山路を急ぎつづけた少年は、今、目ざす土神の祠について身も心も一時にゆるんだのである。やがて信道は靜かに身を起して、祠前に合掌した。

「かあさまを助けて下され。かあさまの御病氣をなほして下され。」

一心に祈をささげる信道の聲は、いぢらしくも力強く祠の中まで傳つていつた。しかし無心なあらしは、病む母の平癒を祈るこの可憐な少年を、ともすると吹きとばしさうにはげしく吹き立てた。

信道は母の病氣平癒を祈つて、二里の山坂を一日の休みなく土神の祠まで通ひつづけた。しかしかうした真心も、つひに天に通じなかつたものか、母は再び歸らぬ人となつてあの世に旅立つた。文化三年六月二十六日のことである。

信道は見る目もいたましく悲歎のどん底につき落された。

「かあさま。もう一度目をあいて信道を呼んで下され。」

母のなきがらに取りすがつて泣き崩れる姿は、日頃から人一倍孝心の深かつた信道だけに、限りなく切ないものがあつた。兄の淨界は弟のこの姿をみて默然と眼をふせた。

兄は近江長濱の福壽院に住む僧侶で、弟がひそかに土神へ日參してゐたことをよくしつてゐた。

二年前、父を失つたときの悲しみも大きかつた。兄淨界はこの悲しみに沈む弟をいとはしく思つて、手許に引き取つて父代りとなつて養育した。そして信道が幼時から豊かな天分のひらめきを見せるのをたのしく思つて、この弟にみづちり學問を仕込んで、坪井の家を再興させたいとの希望ももつてゐた。

それで福壽院へ信道を引き取つても、決して我がままな育て方はしなかつた。十二歳の弟には重すぎると思はれるほどの仕事を、次ぎ次ぎと行はせてやつた。食事の仕度や後片付け、さては洗濯や掃除などは、弟に受け持たせたおきまりの仕事であつた。素直な信道は、よくそれ等の仕事にはげんで、一度も不平らしい顔つきをしなかつた。ちやうど父に仕へるやうに、兄をうやまつてよくその命にしたがつた。殊に母への孝養は、稀にみるほどの誠實をつくし、そのやさしい心づかひと、心のこもつた仕へ方には、母も兄も感動しないでは居られなかつた。

父をなくしてその悲しみがまたうすらがないうちに、母の死にあつて、信道の悲歎は

また新たに深く大きく加へられた。これまで、兄は父親としての厳しきをもつて弟を教育してゐたが、この後は母親としての慈愛も兼ねて、弟をいつくしみ育てなければならなかつた。母に別れて深い悲歎にくれてゐる弟を見て、兄淨界はつくづくさういふことを思つて、自ら心のひきしまるのを覺えた。そこで間もなく、信道を呼んでねんごろに

言つて聞かせた。

「信道や。もう歎くではない。母様はまことにりつばな大往生だつた。お前の孝心をよろこばれながらお亡くなりになつた。

信道よ。この上の孝行はただ歎くことではない。父のおしへ、母のおしへをよく思ひ出して、その名をあげるやうにりつばな人になることだ。殊にお前には、草に埋れ



信道の建てた父(之信)母の墓

た坪井の家を再興する大きなつとめがおはされてゐる。そのためにはどのやうな艱難辛苦にも堪へていかねばならぬ。父母が幼少のお前を残して先立たれたことは、お前を眞に強くりつばに成すための大きな試練だつたと思へ。お前はこの悲しみに堪へていかねばならない。ますます心を強くして、坪井家を興すために奮ひ立たねばならない。亡き父も母もお前にその日の来るのをどんなに待つておいでになるか知れない。兄のことばにはやさしい中にも凜然としたものがあつた。兩親をなくした悲しみは弟に變る所はないが、弟を大成させて坪井家再興をさせねばならない責任を思ふと、弟と共に悲しみに明け暮れしてゐるわけにはいかなかつた。己先づ奮ひ立つて涙のみ、弟の進むべき道を明らかにして、その志をかためてやるのにつとめるのであつた。聞き入る信道にも異常な決意の色がうかんだ。いつまでも憂にしづんで爲す所を知らないやうな弱い心ではいけないと思つた。今こそ立ち上つて、兄の期待にそむかぬ人となるよう、大いに勉めてはげまねばならぬと、殊勝にも心をとり直して、はるかな希望に眼をかがやかすのであつた。

この日もわびしく雨が降つて、何となく二人の心までもしめやかにした。しかし、晴

れ間にもれるひざしには、輝かしい愛の光が感じられて、しめつばい二人の部屋の中まで明かるくさしこんだ。

(二)

晴れた冬空を白雲が流れる。

その白雲の行方^{ゆくへ}を二階の窓によつて、見るともなく見てゐるのは信道である。ここは豊前中津の辛島成菴^{からしませいあん}の宅で、成菴から見せてもらった西洋醫書の「醫範提綱^{いはんていかう}」といふ書物のすぐれて立派なのに驚嘆^{きやうたん}し、まだその感激からさめきらないのである。

「とるに足らない異國^{いこく}の術と、笑つて見すごしてきた西洋醫法が、これほど立派なものとは思はなかつた。漢方(支那の醫術)ばかりを唯一^{ゆい}の醫法と心得て、ただその一すじに精進^{しやうじん}したこれまでの自分は、あまりにも眼界^{がんがい}がせまかつた。」

かういふことを思ひながら、西洋醫學へのはげしい憧^{あこがれ}をいだきはじめて、遠い雲の彼方^{かなた}に目を放つてゐるのである。

その頃信道はもう二十才を越した青年であつた。母に死別してから十年の歳月を経過してゐる。しかも信道にとつて、それは血みどろの苦しみを重ねた思ひ出の十年であつた。

母の死後、兄浄界に伴^{ともな}はれて江戸に出たのは十三才の年で、渡邊奎輔^{わたりべいけいすけ}といふ人について勉學することになつて、その宅にあづけられた。この人は奥平侯の儒官倉成龍渚^{くらなりりゆうしよ}の塾生^{じゆくせい}で、もともと醫學にたづさはる身であつたが、至つて人使ひが荒かつたために、信道は朝から晩まではげしく追ひ使はれて休む間もなかつた。信道、掃除をせい。信道、薪^{たきぎ}は割れたか。信道、飯^{めし}の仕度^{しど}はまだか。信道、ちと肩^{かた}などもめい。といった調子に、矢つぎ早にふりかかつてくる師の命令を、修業^{しゆげふ}と思へばこそ黙黙^{もくもく}に従つた。しかしかんじんの學問の方面は、いつかうに教へられる所がないので、信道は満たされない月日をすごしたのであつた。

しばらくして此の家をはなれて、牧野一徳といふ人を師に仰ぐことになつた。牧野氏も醫師であつたが、誰一人來つて醫療を乞ふ者のないほどその門前はわびしいものであつた。この人も信道を酷使^{こくし}することは前の人もに劣^{おと}らない。ここでもはげしい勞務^{らうむ}に追ひまはされた。十三四才の少年では、とうてい堪へ切れないほどむごく使はれたが、坪

井家再興の一念にもえる信道は、よくこれを忍んで苦しい修業をつづけた。その上、師から必要なだけの生活費がいただけなかつたために、夜は按摩を流しあるいて、小遣錢をかせいだりした。

江戸のかうした生活は、勉學の方面では大して得る所がなかつたが、苦難に堪へる修練は相當にできたもののやうであつた。

その後兄のもとへ歸つてきたが、間もなく良師をもとめ名醫をたづねて、諸國をめぐることにした。その間にはいろいろな人人に會つて、醫學や醫術に關する知識を深めたが、それにもなつて次第に漢方に對するうたがひが増してきた。それがために、自分が漢方醫として身を立てることには、どうしても自信が持てないやうになつた。將來醫師として世につくす方針には、一点のくるひはないのだが、それがために學ばなければならぬ漢方といふものに信賴できないのは如何ともしがたかつた。醫師としての研鑽をかさねつつも、漢方を唯一のものと仰いで、ひたむきに學びきれない所に、信道の大きな惱があつた。

さうした煩悶の幾年かを送つてゐるうちに、このたび豊前において醫範提綱を見る機

會にめぐまれた。それによつて信道の長い疑ひや惱みは一時にきえ、渴してゐるものが水を與へられたやうな、大きな喜びと満足を感じたのである。

「自分の求めてゐたものはこれだつたのだ。蘭法の研究こそ、自分の一生を捧げてつくすべき最善の道なのだ。」

ほのぼのと明かるい二道の光明を見出して、信道は辛島成菴の二階で、じつと白雲の流れる空をながめてゐたのであつた。

(三)

蘭學によつて身を立てる覺悟を定めてから、信道の精進は目ざましいものがあつた。その翌年には廣島の中井氏を訪れ、西洋翻譯書を數冊讀んだ。さうしてゐるうちに蘭學に對する研究心がいよいよつて、もう一度江戸へ出て、當代一流の蘭學者について斯の道の奥義を究めたいと思ふやうになつた。しかし遊學の貯へとて一文もない信道である。そこではやる心をおさへて、下關におもむき、その地で醫術を開業して、江戸遊學の資金を得ることにした。

開業一年半で、いくばくかの資金を手にした信道は、もはや一刻もじつとしては居られなかつた。高鳴る胸をおさへて飛ぶやうに江戸へ出で、かねてその名を聞いてゐた宇田川榛齋の門に入ったのである。

ところが、たまたま兄浄界がにはかに災厄にあつて、多額の金を必要とする破目になつた。父母に代つて自分をいづくしみ育ててくれた兄の不幸である。信道にはそれを見のがしてゐることはどうしてもできない。下關で働いて得た貴重な勉強の資金は、兄の不幸を救ふために、惜し氣もなく投げ出してしまつたのである。

かうして江戸にある信道は、再びもとの無一物にかへつた。しかしせつかくの志を金のために空しくすることはどうしても出来なかつた。

當時信道は、燈明寺と呼ぶ眞言宗の寺の一室をかりうけて、榛齋のもとに通つたのであつたが、その距離は往復五里もあつた。四月に入門して以來、雨の日も風の日も五里の道を遠しとせず師のもとに通ひつづけたのであつたが、十月に入つて、燈明寺では信道に宿を貸すことを斷つてしまつた。金のない書生に見限りをつけたのであらう。

寺から追ひ出された信道は、師の家にはど近い神田の或る家に移り住むことにした。

もちろん、懐に一文の金もない信道であつたから、生活の資は自ら働いて得るより途がなかつた。そこで、昔牧野氏のもとで稼いだことのある按摩を始めて、それで自活の途を立てることにした。

晝は師榛齋のもとで蘭學にはげみ、夜は按摩を流しておそくまで働きつづけた。しかし、片手間の按摩の収入だけでは、食物を購ふ金にも事缺くことが多かつた。朝に一杯の粥をすすり、夕に芋をかちつて夜明けを待つといつたどん底の生活が餘儀なくつづけられた。

しかし、そのため信道の向學心はいささかも衰へなかつた。艱苦に堪へる力は、すでに少年の頃からきたへられてゐる。

やがてこのことが師の知る所となつた。師は信道の苦學にいたく同情して、その塾に引きとり、衣食をあたへて勉學の便宜をはかつてやつた。

信道は師の溫情に深く感動した。そして一層勉學にはげんで、少しも倦む所がなかつた。やがて榛齋門人中、信道の右に出づる者は一人もないまでに、傑出することができた。

かうして榛齋のもとで、七年の長い月日を専ら研鑽につひやし、遂に蘭法醫學の根底までも極めつくしたのである。

(四)

螢雪の功成つて信道は再び開業醫として世に立つことになつた。

師榛齋は、信道が開業の資金に乏しいのをあはれんで、金五兩を貸與してくれた。それを資金にして江戸は深川に醫業を開いたが、當初はたつた一人の門人を加へて、總勢二人といふ微微たる存在であつた。

しかし新しい學問を究めて、新進の醫家として世に出た信道に對して、世人の尊敬と信頼は忽ち高まつて、信道を慕つて教へを乞ふ門人は次第にその數を増し、病客も日に多く集つた。

その弟子を導く態度は、嚴しい一方に溫い情があつた。幼少時代から艱苦と戦ひつづけた信道であるだけに、弟子たちにも決して生やさしい修業はさせなかつた。しかし幼時よりあれだけ親に純情をささげた信道である。それに兄や恩師の慈愛も身にしみて

ゐる。したがつて弟子たちを愛することも亦人一倍で、かうした信道の人格を慕つて集る門人は、遂に前後數百人に達した。

病者を診ることは最も親切であつた。富む人貧しい人の區別なしに、熱心に病人に接するその態度には、みんな感謝しないものはなかつた。ここにも信道の人格が表れて、まことにゆかしい限りであつた。

齡四十の時、長州萩侯に招かれてその侍醫となり、藩主の深い信頼を受けて、祿三百石を賜つた。

かくて名醫としての聲譽はいよいよ高くなり、しかも功成り名遂げた後も、惇惇と門人を導き、懇切に病者を治療し、その多忙のうちに數多くの書物まで著した。

年幼くして父母を失ひ、亡き父母の靈前に坪井家再興をちかつた信道は、今やその志を遂げ、弘化元年には父母の石碑をも建て追恩供養をなし果して、幸福な生活に入つた。しかしまた還暦にも達せず長逝したことは惜しいことである。

九 富田禮彦

富田禮彦は文化八年飛騨國高山に生まれた。幼少の頃より學を好み、九歳の時、時の文章博士菅原長親から「幼學文章觀る可し」とほめられた。

二十歳にして志を立て、同郷の田中大秀について國學を學んだ。國体を尊び、神を敬ふ念が殊に深かつた、或は皇道を説き、或は國政に參與し、維新の新政に貢獻するところが多かつた。後高山縣判事に任せられ、斐太後風土記其他三十餘種の書物を著し、一代の功績大なるものがあつた。明治十年五月三日歿。年六十七。

大正十三年紀元節の佳日に贈位の恩典に浴した。

(一)

富田禮彦は今から凡そ百三十年前、高山の町に生まれた。家は代々高山代官所の役人であつたので、禮彦も十六歳の時から役所へ勤めることゝなつた。

禮彦は幼い時から學問を好み、少しの瞬間も惜しんで漢籍をむさぼるやうに讀んだ。

しかし、勉強しながらも何か物足りないものを感じ、

「一体、日本人が支那の學問によつて道を求めるといふことは、正しいことであらうか。」

と何時しか疑ひを抱くやうになつた。この考へは年と共に深まつて、つひに、

「日本人には、日本人としての道があるはずだ。その道は、當然日本の學問によつて求められねばならない。此の道を忘れて、いたづらに支那の學問ばかりしてゐる自分は、まことに愚か者であつた。」

と悟るに至つた。殊に、母方の祖父小寺清之は、備中にあつて國學者として聞えた人であるを知ると、禮彦の志はいよいよ深まつていつた。

それから間もなく、禮彦は高山の田中大秀の門をたいた。田中大秀は、本居宣長の遺志をうけついですぐれた國學者である。これから禮彦の血の出るやうな勉強がつづいた。古事記・日本書紀・萬葉集・六國史など、皇國の正しい姿を知る喜びに胸をはづませながら、次から次へと讀みふけた。

弟子はよき師を得たことを喜び、師はよき弟子を得て喜んだ。教へる者、教へられる

者、共に眞剣であつた。たゞひとすぢに皇國の道を求めて——これが十七年間續いた。師の大秀が世を去つたのは、禮彦三十七歳の秋であつた。大秀は臨終のせまつた枕邊に禮彦を招き、自分の志をうけついでますますこの道をきはめ、門人を導くことと、す

たれた飛驒の神社、舊蹟を復興して尊皇敬神の精神をひろめることを言ひ遺した。いまはの際の切なる訓に感泣した禮彦は、堅く心に誓ふものがあつた。

「數多い門人の中、自分をかほどまでに信賴して下さる師の御恩に報いる道は、師の訓を身につけて行ふことである。師の志をつぐことが師と共に生きること



富田彌彦

であり、皇國の道にとこしへに生きることだ。」と。

(二)

禮彦は師の訓を守つて日夜勉強にはげみ、飛驒國學の中心となつた。越前、美濃の大秀の門人も、喜んで禮彦に教を受けた。

飛驒は山國である。従つて、一冊の書物を求めるにも容易でなかつた。しかし、禮彦は百方手をつくして求めてはひもといたので、いくつかの本箱には數百部の書物がぎつしりとつまつてゐた。あの有名な水戸の大日本史が出版されたと聞いた時には、わざわざ人を江戸までやつて買ひ入れた。さうして一部寫本を作つてこれを人々に自由に讀ませ、わが國体の尊いわけがらを知らせることにつとめた。又本居宣長の著した古事記傳四十九卷を神官たちにあたへて讀ませ、神ながらの道を知らせた。

古い正しい日本の姿を明かに知つた禮彦には、今の世がなげかはしかつた。源頼朝の幕府以來、かういふ政治のやり方をあたり前のこととしてゐる世人が情なかつた。話がこのことにふれると、禮彦は、ことばはげしく武家の世を憤つて、思はずたばこ盆をうつのが常で、そのためたばこ盆には疵が一面についてゐたといふことである。かやうに

禮彦は幕府の役人でありながら、早くから尊皇の大義に目覺めてゐたのである。毎朝起きると恭しく皇居と神宮を拜し、病氣中でも決して怠ることがなかつた。

それだけに慶應三年十月、大政奉還の報せがもたらされた時の喜びは、たとへやうもなかつた。天を拜し地に伏し、皇居と神宮とをはるかに拜し、涙を流して喜んだのであつた。翌年二月、東山道鎮撫總督の先陣竹澤寛三郎が入國した時には、威儀を正して迎へた。代官所の門前には「天朝御用所」と大書した立札を出し、自らもこれに向かつて禮拜し、人々に向かつて、「飛驒の國もいよいよ朝廷より直接治められることとなつた。」と感激こめて語るのであつた。朝廷では、禮彦がかねがね尊皇の志にあつたことをおほめになつて、御褒美をお下しになつた。禮彦は聖恩のかたじけなさに感泣して一詩をよみ、その終りの句を「飛驒草莽の臣に分ち賜はる。」と結んだ。

(三)

間もなく、寛三郎に代つて梅村速水といふ人が初代の高山縣知事となつた。速水は、禮彦を用ひて、維新にふさはしい新しい政治をどしどし行つた、しかし、それが余りに

はげしかつたので、飛驒の人々の反對が多くつひに争ひも起つたが、禮彦はよく人々と知事との間に立つて、をさまるやうに努力した。

その後の禮彦は、もつばら著述に心をかたむけた。著者の多いことは、師大秀にも劣らなかつた。殊に、飛驒の歴史や地理を研究した「斐太後風土記」二十卷は、もつとも力を費したもので、今の世にも益する点が多い。

禮彦の交つた人には、勤皇家として有名な頼三樹三郎、梁川星巖、橘曙覧等があつた。又その門人には山岡鐵太郎がある。鐵太郎の父は飛驒郡代だつたので、その少年時代は高山に過したのである。

かうしてひとすぢに皇國の道に生き抜かうとした禮彦の一生は、明治十年五月三日に終つた。時に年六十七であつた。

大正十三年紀元節の佳日には、特旨をもつて従五位を追贈せられた。高山市外西山の丘に眠る禮彦の靈は、定めし聖恩のかたじけなさに感泣し、その魂はいつまでも皇國の上に生きてゐることであらう。

十野村藤陰



野村藤陰、名は煥。藤陰はその號である。幼名を龍之助といつた。

藤陰は幼時から學を好み、天保十二年元服の後、大垣藩校致道館に入り、後、後藤松陰・齋藤拙堂・鹽谷岩陰等の學者について學業をばげんだ。後、藩侯の侍講となり、又、藩校の講官・督學等をも勤めて、大いに藩の學政に盡力した。

大垣藩權少參事に進み、専ら學政をつかさどつて盡す所が多かつた。明治維新成つて、評定局の副總裁となり、

晩年私塾を開き、傍ら興文校・師範研習學校・岐阜縣第一中等學校等に教鞭をとり、その薰陶する所の俊才は額る多き上つた。

明治三十二年三月、七十二才にて歿す。大正四年御即位の大典に際し、大正天皇その生前の功を思召されて、特に從五位を贈り給うた。

(一)

天保十二年三月の半過ぎ——時時吹きつける伊吹嵐には、まだうすら寒い早春の名残が感じられたが、さすがに空は明かるく晴れて、日の光はまぶしい位であつた。

大垣城下をはなれて、揖斐の町へ通じる一本の街道を、さつきから急ぎ足に歩いてゐる一人の青年がある。それは今年十八歳になつた野村龍之助である。眉太く額の広い顔に、希望にみちたよろこびを浮かべながら並木の若芽にふりそそぐ春の光を、輝かしく感じて、その足どりも軽く忙しさうであつた。

「おとう様はとても喜んで下さつた。そして、すぐおかあ様に知らせてくるやうにと言つて下さつた……」

龍之助には今朝からの感激の場面が、楽しい繪のやうに一つづつ思ひ浮かべられるのであつた。

藩校致道館に招かれて、講官の小原鐵心先生から入館の許可を申し渡され、飛ぶやうに家へかへつて父に告げ、更に江馬細香先生にお話して、かねて約束の春秋左子傳をいただき……かうして龍之助は希望と幸福におどる胸をおさへながら、ひたすら街道を歩きつづけた。

やがて長々と横たはる揖斐の町が、眼の前にひろがつてきた。母の里方はこの町にある。そして母は数日前から、里方にこりこみがあつて、實家へかへつてゐるのであつた。龍之助は町のとりつきにある母の實家の前へ來た。家のまはりの柿の木の若葉には、午下りの陽がさんさんとふりそそいで、どの梢も輝かしかつた。龍之助は勝手を知つた裏口から、案内も請はずに庭先へまはつた。縁先でさつきから叔父と何事かを話しこんでゐた母は、龍之助の姿を見つけて、

「龍之助。來ましたか。」

と、やさしくほほ笑んで迎へてくれた。

「おかあ様。喜んで下さい。致道館へ入館を許していただきました。」
龍之助はかう云つて、うれしさうに母に話しかけた。

「おお、そなたの望がかなひましたか。」

「はい。今朝ほど、小原先生から申し渡されました。」

輕輩の子弟が、藩校へ入學を許されたのであるから、どんなにうれしかつたかも知れない。

「さうでしたか。おとう様もどんなにかお喜びになつたでせう。」

「はい。お前は野村の家を學問で興すのだと、大へんよろこんで下さいました。それに江馬先生も大よろこびで……。ほれ、おかあ様。この御本をいただきました。」

と、龍之助は大切に懷に抱いてゐた左子傳の一冊を母に見せた。

「おお、江馬先生も！龍之助、そなたは今日よろこびを一生胸にとどめて、決して忘れてはなりませんぞ。そなたの望はかなへられました。これもみんなお殿様をはじめ、皆様方の有難いお情です。この上は、そなたの努力でりつぱに皆様の御期待にそはなければなりません。」

かう言つて母は庭先の柿の木を指さしながら、

「ごらんさい、あの柿の木を。これから幾度かはげしい雨や風にうち勝つて、この

秋には見事に實を結びます。そなたもあの柿の木のやうに、どんな苦勞にもまけないで、今日の喜をりつばにみのらせなければなりません。」

「はい。よくわかりました。龍之助はきつと國のお役に立つりつばな學者になつて、今日の御恩に報います。」

「どうかその言葉を忘れぬやうに。」

母は満足氣にさういつて、龍之助の顔を見守つた。

(=)

それから二十幾年たつた慶應元年のこと。やがて新しい日本が生まれ出よう幕末の頃とて、世の中は何となく騒がしく、人の心も緊張してきた。

春もまだ浅い或る日のこと、龍之助の藤陰は、突然藩老小原鐵心の來訪を受けた。折柄書見中であつた藤陰は、思ひがけぬ鐵心の來訪に恐縮しながら、自ら玄關まで出迎へて、鄭重に座敷へ通した。

やがて二人は靜かに對座した。庭には白い梅が咲いて、午後の弱々しい日光が部屋一

ばいにさしこんでゐた。

鐵心は無言のままじつと藤陰を見つめた。その時藤陰は年四十歳。當時その學者としての名は、大垣藩ばかりでなく廣く全日本に及んでゐた。又、藩校の講官として、藩の教育に大いに力を用ひ、その廉恥を重んじ禮節をたつとぶ人格と、燃えるやうな至誠奉公の精神とは、人々に偉大な感化を及ぼしてゐた。藤陰のこの偉大を最もよく知る者は鐵心その人であつた。すでに少年時代からその非凡な人が見抜いたからこそ、輕輩の子弟であつた龍之助を、快く藩校へ入學させて、その將來に大きな望をかけたのであつた。

やがて鐵心は靜かに口を開いた。

「今日はあなたを見込んで、大切な仕事をお願いに來たのです。」

今まで心持頭を下げて鐵心の言葉を待つてゐた藤陰は、その時はじめて頭を上げて、「もとより藩侯に捧げたこの体。君國のためとあらば如何なる仕事でもお引受けいたしませう。」

藤陰は決然とさういつて、次の言葉を待つた。

「野村さん。あなたは今のわが大垣藩のありさまを、何と見なさるか。——いや、大垣藩ばかりではありません。日本中全体のありさまを見て、一体どう考へておいでになるか。」

鐵心は熱のこもつた語調で、藤陰につめよるのであつた。

「まことに重大時期にむかつてゐると思ひます。國民の一人一人が、本當に自分を磨いて、皇國のお役に立つ人間にならなければならない時に、やれ勤皇だ佐幕だ。やれ攘夷だ開港だと、眼前の議論に追はれて、國家百年の計を忘れてゐる有様を、かへすがへすも残念に思つてゐます。」

「全くその通りです。今こそわれわれは眼前の論議に明け暮れしてゐるときではない。すべからず國家の將來を見通して、今から確かな力を礎き上げていかねばなりません。それには、教育が一番大切です。殊に今の若い人人を、みつちり教育することが、我に與へられた大きな使命だと考へるのです。」

藤陰もこれと同じ考へであつた。

「長州藩の吉田松陰先生も、そのため松下村塾を開いて、日本の柱石となる人人を教育

せられたと聞いてゐます。わが藩も、この教育のことを忘れては、將來皇國に役立つ人材を生み出すことができないと思つてゐます。」

「さすがは野村さんだ。私は今日、その重大な教育の仕事を、あなたに願ひしようと思つて上つたのです。」

藤陰は、即座に引き受けることは到底でき難いといつた色を面に表はした。任務が任務だけに、こゝ一番、大いに熟慮を要すると思つた。

しかし、學者として身を立ててゐる自分が、若い人人を集めてこれを教育する、これほど愉快なことはないと思つた。殊に人材の養成といふことが、最も必要な現今において、一番の英才を集めて、日頃の學識に信念を傾けつくし、やがて新しき日本を背負つて立つ力を養ひ育てることは、自分にあたへられた光榮ある使命だと考へた。

藤陰の瞳には、やがておごそかな決心の色が輝いた。

「よろしい。たしかにお引き受けいたしました。藤陰もともとその器ではありませんが、これまで養ひ育てたすべての力をかたむけつくして、きつと大任を果します。やがて來るべき新しい日本を、背負つて立つ人人を誓つて育て上げませう。」

鐵心は藤陰の決意の程を、非常にたのもしく思った。この人にして始めて教育の重任を成しとげてくれるものと、いたく満足して、厚くお禮をのべた。それから二人は時局を語り、學問を論じて時の移るのも忘れた。

やがて別れを告げる鐵心を門外まで見送つた。いつの間にかあたりは夕闇にとざされてゐる。満天の星は銀砂のやうにかがやいて、この夜は殊の外美しく見えた。

×

明治維新後、大垣藩からは有爲な人材を多く世に送つて、新日本建設につくす所が大きかつた。これは藩主の英明、鐵心の輔翼もとより與つて力ある所であつたが、直接には野村藤陰の薰陶によるものがまことに多かつたのである。

鎌 溪 看 花 藤 陰

鎌ヶ谷に花を見る

兩 山 對 峙 勢 崔 嵬

兩山たいじして勢さいくわい

花 擁 深 溪 錦 障 開

花は深溪を擁して錦障ひらく

爛 玉 倒 瀉 鬱 藍 水

らん玉倒にひたすうつらんの水

千 株 看 作 三 萬 株 一 來

千株見て萬株となし來る

十一 坪 井 伊 助



天保十四年七月二十五日、揖斐郡本郷村草深に生まれた。

文久二年より十五年間、村の庄屋を勤め、後、村會議員・郡農會役員・郡會議員・縣會議員・地方森林會議員・岐阜縣山林會評議員等多くの公職につき、地方殖産興業に盡する所甚だ多かつた。

大正五年十二月、多年の功績によつて藍綬褒章を下賜せられた。

竹林研究者として本邦第一の稱あり、その著書には、竹林造成法・竹類圖譜等、竹に関する名著がある。その中、竹類圖譜は大正五年畏くも

兩陛下 皇太子殿下に献上の光榮に浴した。

大正十四年一月五日、八十三才の高齡で歿した。

(一)

竹藪から金八十兩

「今年竹の値がいゝが、賣つてもらへんかな。」
二人づれの竹買人が、伊助の家へやつて來た。

それは明治十四年、伊助が三十九才の秋の日のことである。

池田山の麓一帯は、見渡すかぎり竹藪つづきであつたが、ただ荒れるにまかせて、誰一人その手入れや利用を考へる者がなかつた。

伊助の家は代々庄屋をつとめ、たくさんの田畑と廣い竹藪を持つてゐたが、その竹藪は雜木まじりの細竹が生えてゐるばかりで、もう何年この方收入といふものは殆んどなかつたのである。

その年は揖斐川に大洪水があつて、ところどころ堤がこはされた。その修理には蛇籠

を多く用ひたのだが、蛇籠を作るには竹が必要である。そのために、にはかに青竹が買ひ集められるやうになつてきた。

それにこゝ二三年來日傘の流行が盛んになつた。その柄竹の需要も急に増すやうになつて、竹の値がひと飛びに高くなつてきたのである。

「ぢやひとつ賣つてみようか。」

竹を賣つたことのない伊助であつたが、つひ賣つてみる氣になつて、さつそく話がまとまつた。

竹買は伊助の藪からどれだけの竹を伐り出した。さうしてその代金として、金八十兩を伊助に手渡した。

伊助はあまりなことに驚いた。八十兩といふ大金が、竹代として自分の懐にころげこむなどは、全く夢にも思はなかつたことなのである。

「こりや開關以來のことじゃ。御先祖様にも喜んでもらはう。」

伊助はさつそく佛壇に燈明をあげて、金八十兩をうやうやしく供へた。米一升八錢何厘といふ當時の世の中であつたから、八十兩がそれ程大金に思へたのは無理もないことで

ある。

「捨て作りの荒蕨あわやぶからでも、こんなに莫大はくだいな収入があるのだ。若しこれに手入れをし
たら、どれだけ利益があるとも知れない。」

伊助は軒端につゞく竹藪をじつと見つめた。その瞳ひまはまるで竹藪に吸ひつけられるや
うに、輝いて動かなかつた。

後年、世界第一の竹林造成学者として、内外に名をあげた坪井伊助は、かうしてその
日から竹に深く心をよせたのであつた。

竹きちがひ

伊助は急に竹藪で暮らす日が多くなつた。暇ひまさへあれば鉋たを手にして竹藪の中へ入つ
ていつた。そして、枯竹や雪折竹の始末しまつをしたり、雑木ぞうきを拂つて藪の整理をしたりして
時のたつのも忘れたもののやうに、かひがひしく働いてゐた。

村の人達は、伊助のうつつて變つたこの様子を見て、いろいろかげ口をきくやうになつ
た。

「あんまり竹の値がよかつたので、慾ひまと二人でせちからくやつてゐる。」

大抵の人人はさう言つて、伊助の慾ひまの深さを見下げてゐた。

しかし伊助は相變らず竹藪に入つていつた。来る日も来る日も、伊助の姿を竹藪に見
かけない日はないもののやうであつた。

村の人達は、とうとう彼を氣ちがひと見るやうになつた。

「伊助さんは、とうとう竹氣たけけちがひになつた。」

さう言つてあざけり笑ふ人もあつたのである。

或る日伊助は、とり分け育ちのよい竹に目を止めた。さはつてみると、すばらしく太
くて質ちかのよいものであつた。それは塵捨場ちりすてはに育つて、十分養分を吸ひとつた竹だつたの
である。

「なる程。竹にも肥料があるのであつた。」

伊助はさういつて感嘆かんとんした。それはいかにもあたりまへのことである。しかし昔から
竹は自然のまゝに放つておくべきものと、さうきめこんでかへりみない村人達には、思
ひもよらないことなのであつた。伊助も今日まではその一人で、今更ながら自分のうか

つに氣づいて、深く感動したのである。

伊助はその日から、竹藪に肥料をあたへることにつとめた。それは附近の荒地から、よく肥えた土を運んでは、藪の中にばらまいていつたのである。

村人は、これも竹氣ちがひの常軌じょうきをはづれた行ひと、笑つて見て通つた。親戚しんせきの人々は相寄つて口口に、そんなむだな骨折はするなといつていさめた。

しかし伊助はただたまつて笑つてゐるばかりで、一向に仕事を止めようとはしなかつた。

それから幾年かすぎた。

土を取り去つた荒地は、見事な水田に變つて青々と稻が育ら、土を運び入れた竹藪には、七八寸の見事な竹がすくすくとのびて、うす暗く茂つてゐた。どれも伊助の年來の丹精たんせいが、今ここに立派に報むくひられてきたのである。

村人は互に顔を見合せて驚いた。なる程、伊助さんの骨折りは、氣ちがひの無駄事ではなかつたのだと、やうやく敬うやまひの心をもつて、その行ひに注目するやうになつた。そして誰もが、「わしも伊助さんのやうに竹藪が作りたい。」と思つた。

やがてみんなは言ひ合せたやうに、何百年來荒れるにまかせてかへりみなかつた藪にいろいろと手を加へ出した。

或る者は雜木を伐り取つた。或る者は沃土よどを運び入れた。又或る者は古かやを投げこんだりした。いかにも自分の竹藪がかはよくなつたやうに、競きそつて藪の手入れに骨折るやうになつた。

伊助は愉快でたまらなかつた。自分の竹栽培たけさいばいの熱心さが、いつの間にか村人達にもうつつて、みんなああして藪に心をよせるやうになつたと思ふと、一層大きく報いられたやうな氣がしたのである。

さうしてつとめて親切に教へてやつた。

「肥こえた土を草こゑの肥こゑにしてはもつたない。草を取れ、草を取れ。」

「古かやは、ひろげてやらないと根がはつていけない。」

「竹は三年子を伐るものだ。」

かういふことを言つて、栽培上の心得を教へてやつたが、それはみんな彼が竹氣ちがひと言はれるほど、栽培に熱中して得た尊たいげんい体験なのであつた。

かうして一年また一年とたつ中に、池田村一帯の竹藪は見ちがへるほど立派に茂つてきた。したがって収入も年々増して、村は昔にくらべてだんだん豊かになつていつた。それにつれて伊助の信望もまた高まつた。

「竹のことなら伊助さんに聞け。」

みんなさう言ふやうになつて、伊助の功績は漸く社會にみとめられ、その門をたいて教へをこふ者も、だんだん多くなつてきた。

「竹は他家の子じやない」

「竹は他家の子じやない。わしの大事な子じや。」

伊助は常にさう云つて人に語つた。

竹藪の改良に全生命を打ちこんだ伊助には、毎年竹の出る頃が待ち遠しくてならなかつた。それはちやうど、生まれ出る我が子を、一日千秋の思ひで待ちわびる母親の心持とかはる所がなかつたのである。

五月雨がふりつづいて、かはい竹が土の中から頭をもたげるやうになると、伊助は

もうじつとしてはゐられなかつた。毎日藪を見廻つては一本一本、熱心に観察をつづけていつた。

野兔にかぢられた竹を發見すると、出る竹、出る竹に、新聞紙で作つた袋をかぶせて山の横着物から安全にまもつてやつた。巻葉の先に白い糞のついてゐる竹を見つけると、いねいに巻葉の部分を切り開いて、中から夜盗虫を取りだし、竹の生長を続けさせてやつた。

かうして「他家の子」と思はぬ可愛い我が子に慈母の温かい手をさしのべてやるのであつた。

「雨後の竹は育ちにくい」といふ。なる程雨後の竹には、行き止まりが多い。研究心の強い伊助は、どうかしてその原因を科學的につき止めたいと思つた。

或る日ひねもす家の中に閉ぢこもつて、あらゆる参考書を讀みあさつた。

或る時は「止り竹」を掘りこつて、その皮を一枚一枚注意深くはぎとつてみた。それでもなほ原因が究められないので、株を掘り起して、その根まで丹念に調べたりした。かくて数年の間、極めて熱心に研究をつづけて行つた。さうして遂に「止り竹」の原

因を明かにし、これを世に發表することができた。それは未だ曾つて何人にも知られなかつた「止り筈」に關する學說である。

明治三十年代から四十年代にかけて、「自然枯」といふ奇妙な現象がつづいて、全國の淡竹が全滅に陥らうとしたことがある。自然枯といふのは、藪が古くなると、竹に花が咲いて養分を費し、遂には枯死する現象である。それは「竹が絶える」といふ恐ろしい結果になるのである。

竹に生きる伊助にどうしてこの現象をだまつて見てゐることができらうであらう。

果して伊助は、自然枯の原因とその對策に、心血を注ぐやうになつた。

彼は全國をくまなく廻つて、自然枯の分布の状態や、被害の實情をこまかに調べた。又一方には自然枯に關する舊記や傳説を多く讀みあさつて、その方面からも研究を進めた。

さうして遂に、「自然枯の研究とその對策」を完成して、これを學界におくつたのである。「自然枯の研究とその對策」——これこそ伊助が竹林界に残した最も大きな功績であつた。

彼は更に開花の形態から竹の實の利用に至るまで、綿密な研究をとげてその對策を世にすゝめた。「坪井の實生竹」は、今もなほ伊助がのこした標本園に茂つて、その功績をいつまでも物語つてゐる。

怪我の功名

遠い鳥取縣から黒竹の苗が届いた。

待ちこがれた黒竹なのである。伊助は飛び立つほどうれしかつた。

「大事な竹だぞ、氣をつけて運んでくれ。」

伊助はかう下男に言ひつけて、二人がかりで大切に苗竹を運ぶことにした。ところがどうしたことか、不覺にも下男がその大切な苗竹の一株を地上に取り落してしまつた。見ると親竹は根本からぼつきり折れてしまつてゐる。

伊助は下男の不甲斐なきを口惜しく思つて、一度はどなりつけてみたが、いくら怒つても今更どうにもならないことに氣がつくと、落した株はそのままに捨て、他の苗株だけはていねいに移し植えた。

程經て伊助は以外な事實を見た。この間うち捨ててかへりみなかつた親株から、かはいい筍が二本も三本も頭を出してゐるではないか。しかも、移し植えた親株からは、待てども待てども、一本の筍も姿を見せないのであつた。

伊助は深く考へこんだ。

そして深く心に期するものの如く、移植したばかりの黒竹の親を、根本からすばすと伐り取つてしまつた。

間もなく親竹を切り拂つた竹株から、筍が次々と頭を出してきた。それは果して伊助の豫期した通りであつた。

そこで、親竹を切り取つた親株と、切り取らない親株とを同時に移植してみて、黒竹と同じ結果を得た、カシロダケについても、同じことを試みて成功した。あらゆる種類の竹の移植に、同様な實驗を試みたが、何れも同じ結果を得た。

伊助は下男の失敗がもつたつて、尊い事實を發見したことをたいそう喜んだ。これこそまことに「怪我の功名」だと思つた。

かうして伊助によつて發明された竹の移植に關する新しい方法が、次第に世の中に廣

まつていつた。これが有名な「坪井式植栽法」なのである。

坪井の四角竹

或る年の内國勸業博覽會の時のことであつた。

伊助は宮崎縣諸方郡から出品された四角竹の前にじつと立つてそれを見つめてゐた。

「四角い竹」といふことが、いかにも珍しく不思議に思へたのである。さうして自分もそれを作つてみたいと、深く心に決心して歸つてきた。

それ以來、彼は人工で四角竹を作る研究に没頭した。しかし餅や餡ならいざ知らず、圓い習性をもつた竹の幹を、三角や四角にすることが、果してできるであらうか。

かうして幾年かすぎた。目ざす四角竹を作り出す方法はまだ考へられない。今日も四角竹のことを思ひ浮かべながら、いつものやうに竹藪の中へ入つていつた。

藪の手入れに従つてゐた彼は、おもしろい竹の一株を見つけた。それは杉の根株と大きな石にはさまれて、やむなく形をかへた一本の「三角竹」であつたのである。

伊助はハタと手を打つた。「さうだ。四角竹はかうして出来るのだ。」

發明や發見の動機は思はぬ所に秘められてゐる。しかし、それに氣がつくことはなかなか容易なことではない。ただそのことに熱中して倦まない人ばかりが、よくその動機をとらへて、つひに輝かしい榮冠をかち得るのである。

伊助にとつて、翌くる年の春が殊の外待ちどほしかつた。

霞間谷の櫻も散つて、そろそろ筍が頭をもたげ初めると、伊助は様様な板切れを持つてきては筍にしばらくつけた。筍はそれ等の板切れを身につけたまま、どれもこれもすくすくと伸びて行つた。

やがて夏がきて竹の緑が一際目立つやうになると、伊助の竹藪には三角竹、四角竹その他様々の異様な形をした竹が、見る人の眼を驚かせるのであつた。

伊助はどうとう四角竹の栽培に成功したのである。自分の思ふままに、竹の幹の形をかへるといふ前人未發の方法を會得したのである。

「なんでも工夫してやつてみることだ。」

伊助は今更のやうに深く感動して、見事に作られた四角竹の幹に、よろこびの眼をそぐのであつた。

(二)

生きる力

「伊助さんは、ほんたうによい人だ。」

伊助翁を知る者は誰もさう云つてその人がらを慕つた。

伊助は少しも飾り氣のない純情な人であつた。それこそ彼が精魂をうちこんだ竹の素性のよさに感化されたのではないかと思はれるほど、素直にすんなりとした性格であつた。その人間味ゆたかな人格には、誰も引きつけられないではゐられなかつた。しかし翁は家庭の幸福には恵まれなかつた。

十四才で父を失ひ、十七才で母に死別した翁は、すでに少年時代から人間苦を味はつていつた。長じて妻を娶り、一家の主となつたが、年若くして妻に先立たれ、晩年はまた力と頼む二子を相ついでなくして、心中まことにやる瀬ない寂しい思ひをした。

けれども翁の生きる力は、苦難にあふごとに鍛へられ、その人間味にもうるほひを増していつた。

「わしは子供の時から、随分苦勞した。」
と、時折述懐をもらしたのであつたが、その苦勞がかへつて翁を人間的にりつばなものに鍛へたのであつた。それでもその苦勞のために、少年時代に書物を學ぶことのできなかつたことを、翁は終生残念に思つてゐた。

「わしは若い頃に勉強できなかつたから……」

と言つては、學問の不足を嘆いてゐた。

しかし、生まれながらの聰明とたゆまない努力によつて、彼はまれに見る篤農家として、世人の尊敬をうけた。

有名な金原明善といふ人が、若き頃の彼に初めて對面したとき、

「君はなかなか聰明だ、將來きつと何事かを成し遂げるであらう。」
と云つたといふ。果して金原翁の豫言の通りであつた。

六十の手習

翁は暇さへあれば講習會に出席した、村有数の地主で、名家で、それに學問も深かつ

た翁であるのに、あんなえらい人が何故講習會などを受けるのかと、村の人々にはそれが不思議でならなかつた。講習會のある毎に、熱心な聽講者の一人として、少しも倦む所を見せない向學心のさかんな姿をみて、

「坪井さんでさへあの通りだから。」

といつて、人々は自ら勵まされる所が多かつた。

翁には幼少の頃から頭の震ふ病氣があつて、その上至つて文字を書くことが下手であつた。

後には、よく農事講習會の講師として、各地に招かれて出張したが、折々人々に揮毫を請はれて、はなはだ困りぬいた。

「竹の話ならなんでもするが、字を書くことだけはほんとに苦手じや。」
といつては、いつも辛い経験をくりかへした。

五十七才の時、甲府にゐる有名な若尾逸平翁に會つた。逸平翁は三十七歳で發奮し、一代に巨萬の富を作りあげた當時の偉人であつたが、坪井翁はこの人にまことに立派な文字で書かれた半切を示された。ところがその逸平翁は生まれつき、文字を書くことが至

つて下手であつたものを、感ずる所あつて六十九才にして手習を始め、晩年、見事な文字を書き得るまでに刻若精勵した。この話をきいた坪井翁は、大いに心を動かされたのであつた。

「逸平翁は今年八十歳、自分は翁より二十三才も若い。たとへ震顛の病氣があつても努力して上達しないはずはない。」

持前の若若しくてたくましい氣力をふるひ立たせて、まさに六十に達せんとする年頃で奮然と手習に熱中し出した。

翁は手習の外、文字といへばちよつとした記録でも、日常の手紙でも決していそいだりあはてたりして書かなかつた。一字一字丹念に筆を運んで、一点の心のゆるみも見せなかつた。

甲斐あつて翁の手蹟はだんだん見事になつていつた。しかもその筆蹟には、翁の人格が遺憾なく現れた。飾り氣なく素直で、あくまで自然に自由でありながら、ゆるみなく張り切つた所、まるで竹の姿その如くでもあつた。翁の書に接する人々は、「人間竹林翁」を見るやうだと云つて親しんだ。

竹林翁坪井伊助の遺墨は、今も各地に保存されてゐる。

坪井の閉めた門

翁は自分の學問の不十分なのを歎いて、せめて我が子にだけは十分教育をしてやりたいたと思つた。そして長男の速水が十二才になつたとき、遠く東京へ勉學に出した。

「お前はもう子供ではない。立派な人間にならないうちは、決して家へ歸るんではない。」

かう言つて明治の初年、交通の不便な東海道を、十二才の子供に一人旅をさせた。しかし、遊學中の愛兒がもしや都會の惡風にそまつて、志を空しくしはしないかと、常にその身の上を案じてやつた。

「勉學は家貧しくて身に入るものである。わが家は幸か不幸を富すぎでゐる。」

翁はかう考へて、我が子の修學のために深く期する所があつた。

「よし家屋敷を賣り拂はう。」

大地主坪井伊助翁が、りつばな邸宅を賣りはらうと聞いて村の人々は驚いた。翁の心

中を知らない人々にとつては、まことに奇異なことであつたにちがひない。翁は永年住みなれた我が家を出て、粗末な新宅に移り住んだ。廣い舊宅は荒れるにまかせ、その堂々たる門はいつまでも堅く閉ざされてゐた。

「坪井の門で、占めたもん（閉めた門）ぢや。」

村の人々はいふ駄じやれを言ふやうになつたが、翁はこれを耳にしながらも、一人いふせき伏屋に起き居して、ひたすら愛兒の遊情をいましめ、學の成る日を待つてゐた。後年長男速水の學成つて、醫學博士の學位まで授けられるやうになつた。翁はこの時親しい友人に笑ひながら語つた。

「わしは醫者だが、數醫者だ。せがれはりつばな醫者になつて、せめてもわしは安心ぢや。」

人間竹林翁

翁の晩年は寂しい生活だつた。しかし翁はその寂しさにまけなかつた。寂しさを深く味はへば味はふほど、悲しみの試練を経れば経るほど、ますます人生と自然に愛着を深

めていつた。長子速水も次子秀も共に翁に先だつてなくなつた。

「お祖父さまの病氣にさはつてはいけないから。」

といふので、家人はその死を祕して、病中の翁に語らなかつた。しかし翁はそのことをいつのまにか知つてゐた。そして病を案じて二子の死を語らうとしない家人の心中を察して、涙ぐむことさへあつた。

「今ここでわしが倒れたら、残る孫達がこまるであらう。わしは今死んではならない。」翁はさう思つて、憂ひに沈んだ顔は決して家人に見せなかつた。さうして一段と元氣をまして家人をばげました。

「いゝか。何も心配するなよ。お祖父さんがついてゐるから。」

孫を病床の枕頭へ呼んでさういつた。その心中には、自分の老齡を思ひ、幼い孫の身の上を思ひやつて、切ないものがあつた。

大正十四年、八十三才の正月を迎へて間もない五日の日に、とうとう翁はなくなつた。若い時代から幾多の試練を重ねて、修行、研鑽の一路を進んだ人にふさはしく、靜かな大往生であつた。

十一名 和 靖

我が昆虫學者名和靖は、安政三年十月八日、本巢郡船木村字重里に生まれた。明治十五年岐阜縣農學校を卒業後、同校及び師範學校、中學校等の教職につき、その余暇に山野を駆けめぐつて昆虫を採集、或は飼育して研究につとめた。

明治二十九年四月師範學校教諭を辭し、獨力岐阜市内に名和昆虫研究所を設立し、農作物害虫驅除豫防の研究に没頭した。三十年九月より月刊「昆虫世界」を發行し、有益な研究を續々と發表した。中でも「うんか」「白蟻」についての研究は有名で、全國害虫驅除講習會の委嘱を受け講師となり、又縣内外各地の講習會に招かれ指導した。かくてこの害虫の新しい驅除法發見の結果、我が國農業及び古建築にもたらした恩恵は、實に大きいものがあつた。

大正十五年八月十五日、七十歳で歿した。靖が生前採集した昆虫は凡そ百三十余萬匹、標本に製作したもの凡そ八十余萬匹に上るといふ。

歿するに及び畏くも大正天皇は靖の功績を思召され、特に正五位を賜つた。

(一)

文部省高等科第二學年の修身書には、名和靖の少年時代に於ける次のやうな一挿話そらわががのせてある。

靖は明治十二三年頃、岐阜縣農學校に學び、その寄宿舎に起臥ぐわしてゐた。當時、靖は日曜日毎に學校から十二キロメートルばかりへだつた我が家にかへつて、一家の人々の無事な顔を見るのを樂しみとしてゐた。靖の祖父は園藝を好み、いろ／＼の果樹や草花を集め、特に薔薇ばらは多くの種類を集めて栽培してゐた。靖は家に歸ると、祖父の栽培する種々の果樹・草花を見るのがすきであつた。

或日、靖は祖父が大切にしている薔薇の新芽が大いに害さなはれてゐるのを見つけた。靖はどうかしてその害虫を取除いて、完全な美しい花を咲かせ、祖父を喜ばせたいと思つた。ところが靖は一週間に一回歸省きせいするだけであるから、すつかり取除いたはずの害虫が、次の日曜日に歸つてみると、その間に何處から來るのか又集つて來て、新芽を弱らせてゐた。取つても取つても新に集つて來て、容易に取りつくすことができなかつた。そこでよく注意して見ると、最初一種の害虫と思つたのが二種であり、その外害虫と思つたのが意外にも益虫であつたりして、觀察を重ねるに従つていろいろの事實を發見し

て、昆虫界の複雑微明な關係に驚いた。

そこで靖はこれらの害虫を除くには、害虫の種類と其の性質を知るのが第一であると

気がついて、それからは歸省する毎に家にも入らず、先づかの害虫の状態をしらべ、その後で一家の人々に會ふのを常とした。人々の無事な顔を見た後は、またすぐ薔薇の一株について害虫の研究に没頭した。靖が思ふには、觀賞用の植物がかやうに虫害を受ける以上は、農作物もきつと昆虫の害を受けるに相違ない。その害を防ぐやうにしろ



靖 和 名

たならば、國家の受ける利益は莫大なものであらう。」と。こゝに於て靖は昆虫の研究に全力を盡くさうと決心した。

(=)

明治二十年のある夏の夜のことである。

岐阜の伊奈波神社の境内に集つた人々がわいわいとさわいでゐた。天狗さまが出るとうはさに、みなおびえ切つてゐるのである。中には、今時そんな馬鹿なことが、と信じようとしなない人々もあつたが、ほとんどの人たちは今にもそこへ天狗があらはれるやうに恐れてゐた。そこへ、長良川堤の方へ見廻りに行つてゐた若者が、青ざめた顔でこの一團の中へとび込んで来た。

「今わしはちやんとこの目で見て来た。あやしい火が、西から見ても北へまはつてもともつてゐるのだ。天狗さまの火點にちがひない。」

もう誰一人疑ふ者はゐない。人々は全く色を失つてしまつた。かうして、伊奈波山に天狗さまが出るとのうはさがだんだんとひろまつていった。しかし、そのあやしい火の正体は、天狗さまではなくて、靖がとす昆虫採集の火であつたのである。すなはち、靖は夜中に珍しい蛾をとらへようと思つて、金華山のあち

こちらの樹の幹に甘い汁を塗っておき、夜になると弟子をつれ釣鐘のやうな形の籠頭提灯を持つて採集して歩くのであつた。こんな夜更けに、しかも毎夜のやうにこんな貴重な研究がつづけられてゐるとは、當時誰一人知らなかつたのである。靖は、この深夜の研究によつて當時すでに有名な「ムクゲコノハ」といふ昆虫を捕へたといふことである。

(三)

高山線開通後の御嶽登山は、さしてくるしくもないが、今から五十余年前の登山は、ちよつと想像もできないほど難儀であつた。靖は愛弟子の梅吉と人夫の三人連れで、御嶽頂上の昆虫を研究するために、採集の道具をもつて出發した。

關、殿村、神淵、金山を経て小坂へ着いた。小坂では相當多くの採集をして興味を深くした一行は、御嶽登山口にしばらく逗留した。こゝでおもしろい蛾を捕へることができて元氣百倍、更に中腹の「さいの河原」では「ヒメシロバタ」といふ夜盗虫の一種を採集することができて大満足であつた。この蛾はなかなか捕へるのに困難であつたといふ。蛾は保護色をしてゐて、石にとまつてゐると少しも分らない。たゞ舞ひ上ると裏側

が白いので發見出来るのであるが、何分強風が山腹を吹きまはり、その中で捕へるのは一苦勞なのである。しかし、一行はこゝで苦心の末相當採集ができ、非常に喜んだ。一行は途中熊取りの名人をやとひ、更に山頂をきはめて研究をつづけた。山頂では皆既日蝕に出あふことができて、科學者として因縁のよかつたことをよろこび、昆虫の研究に一段と強い決心をいだかれたといふことである。

(四)

「名和、白蟻の被害は實に大きいものだなあ。陸軍で一ケ年に失ふところの費用は、三百萬圓にも上る。これはあたかも陸軍一個師團を食つてしまふと同じわけになる。名和、白蟻を防ぐ方法について何とする。」

これは、明治四十三年八月、時の會計検査院長子爵法學博士田尻氏が岐阜へ來遊の節靖に對する質問であつた。この叱りどばされるやうな質問に對して、靖はその時何ともお答へすることができなかつたが、ともかく、

「今まで多年昆虫研究に従事してゐる間に受けた質問は非常にたくさんありましたか、

それはほとんど農作物の害虫駆除に關する事ばかりでありました。白蟻駆除の質問は全く初めてで、何ともお答へすることができませんが、將來白蟻に關して大いに研究した上で、確かなるお答をすることにいたします。」

といはれたら、博士は膝をうつて、

「よし、名和大いにやれ。」

と激励されたといふことである。この博士の質問によつて、白蟻の被害の大きいことをさとる事ができたと同時に、之が駆除豫防研究の必要さを深く感銘されたのであつた。

靖はこれより白蟻について、日夜研究に没頭して、つひに駆除に有効な方法を發見した。靖は大正六年四月より、歴代九十帝陵をはじめ、各地の神社、佛閣約六百餘箇所を巡拜し、白蟻調査に従事してその駆除につとめたのである。靖が「昆虫翁」より「白蟻翁」とまで變名されたほどであつた。

尙、翁の事業として待に有名なのはこの「白蟻」の外に「浮塵子」の驅除がある。

明治三十年、全国的に「浮塵子」が大發生をし、そのために稻田は大損害を受け、その額は實に七千五百萬圓に上つたといふ。その頃世間の人々は「浮塵子」は自然に湧く

ものと信じてゐたので、その驅除の方法もまちがつてゐた。

靖は時こそ來れりと、多年研究したところを發表し、いよいよ大活動を開始した。縣下の或る村ではこの驅除の方法がりつぱに出來て、一村一萬圓くらひの損害から救ひ得たといふ。西は、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口の各府縣、東は山梨、茨城、福島、宮城等文字どほり東奔西走してその驅除につとめた。

この「浮塵子」の發生のため一大損害をうけた農家も、はじめて害虫の恐るべきことを自覺するに至つた。それ以來、各府縣各農會、又は教育會等の主催で、種々の昆虫に關する講習を開くこと、三百餘回にも及んだといふことである。

(五)

願れば六十路余りは夢なりき

死後の長きに生きんぞ思ふ

六六の間に作る置土産

残りしものは罪ばかりなり

これは翁が歿せられる四年前、大病にかゝり、主治醫が今夜もむづかしいといはれた際に發表された辭世であつた。

研究に余念のなかつた翁としては、さぞかし夢のやうに早い一生であつたであらう。しかし、死後の長きに生きようとの心境は、凡人の得て望むことの出來ない境地である。しかし一生を我が國の學界に又農産増強に貢獻せられた功績を思へば、その尊い生涯に自づと頭の下るのを覚えるのである。

最後の遺言三ヶ條を左に掲げることとしよう。

- 一、葬式は出來得る限り質素にすること。若一、所葬(研究所葬のこと)といふことが起つたら、遺族はこれを斷ること。どうしても所葬をするといふ場合には、條件をつけること。それは名和家人で執行するより質素にすること。
- 一、若一、香奠として知己友人より受けたるものは、悉く研究所の基本金に加へてもらふこと。

一、告別式は昆虫にしてから。

告別式は、自分が多年苦心して集めたる數十萬の昆虫標本に先づ以て告別がしたい

から、必ず寢棺に入れ、そして記念昆虫館の白蟻觀音堂の左手に置いてもらひ、昆虫に告別がしたい。それから告別の意のある方には、六時間、即ち午前十時から午後四時までの間に於てしてもらふこと。(六の數はムシ、昆虫の足は六本等翁に係深い)

附錄 年表 [死役者・年齢]

天皇紀元	年號	國史	郷土史
後陽成天皇 二二六〇	慶長五	關ヶ原合戦 八年徳川家康征夷大將軍ニ任ラル	此頃國內諸大名旗本ノ領地次第ニ定マル
後水尾天皇 二二七五	元和元	前年大阪冬ノ陣、今年夏ノ陣	[前年岡田將監善同74] [陶祖筑後守景延]
明正天皇 二二九二	寛永九	林羅山孔子廟ヲ江戸忍ヶ岡ニ建ツ	美濃飛騨兩國ノ地圖、石高帳成ル
後光明天皇 二三〇五	正保二		三年九月二日美濃大出水
二二〇八	慶安元	[中江藤樹41]	
二二二二	承應元		
後西天皇 二三一五	明暦元	[三年林羅山75]	[大垣城主戸田氏鐵80]
二二一八	萬治元		
二二二二	寛文元	幕府諸大名ヲシテ皇居造營ヲ助ケシム	寛文中曾代用水成ル
靈元天皇 二三三五	延寶三		
二三四二	天和二	[山崎闇齋65]	
二三四五	貞享元	[翌年山鹿素行64]	秋芭蕉美濃尾張ニ遊ブ

年	表	國史	郷土史
東山天皇 二三五〇	元祿三	將軍綱吉孔子ノ廟湯ヲ島ニ建ツ	幕府高山城主金森氏ヲ出羽ニ移シテ飛騨國ヲ直轄ス
二三五二	五	徳川光圀湊川ニ楠木正成ノ碑ヲ立ツ	岩村藩學校知新館ヲ建ツ
二三六二	一五	大石良雄ヲソノ主ノ讐ヲ復シタ	本庄氏ノ高富陣屋置カル
中御門天皇 二三六九	寶永六	新井白石ガ皇族御出家ノ習ハシヲヤメルヤウ幕府ニ申シタ	安藤氏加納城主トナル
二三七一	正徳元	幕府朝鮮使者ノモテナシ方ヲ改メタ	
二三八〇	享保五	吉宗ガ洋書ヲ輸入スル禁ヲユルメタ	
二三九四	一九	[室鳩巢77]	京保年間高須ニ日新堂建ツ
櫻町天皇 二三九六	元文元	[荷田春滿69]	五年十一月岡田又次郎(寒泉)江戸牛込ノ邸ニ生ル
二四〇三	寛保三		加藤步齋高山ニ生ル
二四〇四	延享元	[石田梅巖60]	四年江馬關齋大垣ニ生ル
桃園天皇 二四〇八	寛延元		三年竹々鼻ノ佐吉佛鑄ラル
二四一一	寶曆元	[大岡忠相75]	三年ヨリ五年ニ至リ油島千本松締切堤工事
後櫻町天皇 二四二五	明和二	幕府醫學館ヲ建テ漢方ヲ教フ	五年六月廿三日林述齋江戸鍛冶橋岩村藩主家ニ生ル
二四三二	安永元		十月佐藤一齋江戸ノ岩村藩邸ニ生ル 六年田中大秀高山ニ生ル

光格天皇 二四四二	天明二	大槻玄澤蘭學階梯ヲ著ス	飯沼慈齋生ル
二四四三	三	幕府異學ヲ禁スルヲ令ス	名古屋藩太田・上有知兩代官所ヲ置ク
二四四九	寛政元		六月梁川星巖大垣在ニ生ル 〔佛佐吉88〕
二四五〇	三		村瀬藤城上有知ニ生ル
二四五三	五	四月五日松平衛林家ヲツグ 〔高山彦九郎47〕	座田維貞高須ニ生ル 七年一月坪井信道揖斐郡本郷村 脛永ニ生ル
二四五八	一〇	本居宣長ガ古事記傳ヲ作り上ゲ 〔本居宣長72〕	江澤榕庵大垣ニ生レ後宇田川家ヲ繼グ
二四六一	享和元		四月田中大秀廿五歳、鈴屋翁ノ門ニ入ル
二四六五	文化二		赤田臥牛等高山教授所ヲ開ク
二四七六	一三		閏二月富田禮彦高山ニ生ル 〔十一年久世友輔64〕 翌年小原鐵心生ル
二四八七	文政一〇	頼山陽日本外史ヲ著ス 〔岡田寒泉77〕	正月野村藤城大垣ニ生ル 〔加藤步齋85〕 文政年中加納藩憲章館成ル
二四九七	天保八	春大塩平八郎亂ヲ大阪ニ起ス	大垣藩校致道館ヲ創ム 〔九年江馬蘭齋92〕
二四五三	一四	〔十二年林述齋74〕〔平田篤胤68〕	七月廿五日坪井伊助揖斐郡本郷村草深ニ生ル
二五〇五	弘化二	外船浦賀ニ來ル	星巖玉池吟社ヲ閉テ翌年上洛ス 〔四年田中大秀54〕 〔坪井信道54〕〔六年村瀬藤城63〕
二五〇八	嘉永元	翌年星巖京都鴨沂ニ居ル	

二五一五	安政二	安政ノ大獄 〔藤田東湖50〕	三年慈齋草木圖說ヲ刊行ス 翌年十月八日名和靖生ル
二五一九	六		〔前年梁川星巖70〕〔座田維貞65〕〔佐藤一齋88〕
二五二〇	萬延元	櫻田門外ノ變	益田郡下原ノ加藤素毛幕使ニ從テ渡米ス 〔江馬細香75〕
二五二一	文久元	大船ヲ造リ又西洋形船購入ヲ許ス	和宮御東下
二五二四	元治元	蛤御門ノ變、長州征伐	冬武田耕雲齋等中仙道ヲ西上シ越前ニ進出ス
二五二五	慶應元		二月十二日勤皇ノ志士所郁太郎周防國ニテ歿ス〔28〕 〔飯沼慈齋84〕
明治天皇	三	十月徳川慶喜大政奉還、十二月九日皇政復古ノ令ヲ發シタマハク	十二月十一日勤皇志士西山謙之助下野國ニ戦死ス〔23〕
二五二八	明治元	正月鳥羽伏見ノ戰	小原忠寛(鐵心)參與職ヲ任セラル 官軍東征 〔高岡夢堂53〕
二五二九	二	諸藩版籍ヲ奉還ス	
二五三一	四	藩ヲ廢シ縣ヲ置ク	
二五三二	五	學制頒布	
大正天皇	大正一四		美濃國十八郡ハ岐阜縣、飛騨三郡ハ筑摩縣ニ屬ス〔九年マテ〕 〔小原鐵心56〕
今上天皇	昭和一五	紀元二年六百年記念式	〔坪井伊助83〕〔翌年名和靖70〕

昭和十八年二月二十日 印刷
昭和十八年二月廿五日 發行

郷土の偉人(上)
定價金五十錢
送料八錢

不許
複製

出文協承認ア 270285

著作者

岐阜縣教育會

印刷者

代表者 阿部榮之助
岐阜市神田町六丁目一番地
矢崎正治

印刷所

岐阜市北野町十番地
昭文舎印刷所
(會員番號中岐三一)

發行所

岐阜市美江寺町廿六番地
岐阜縣教育會

發賣元

岐阜市神田町六丁目一番地
大眾書房

(文協會員番號一一六一七八)
電話二五二五番
振替東京四一八七八番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

終

